
魔窟で愛を語りましょう

屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔窟で愛を語りましょう

【Nコード】

N5940Q

【作者名】

蜃

【あらすじ】

汚屋敷製造人の家族から解放されたくて家を出る決意をしている芽衣。ところが、突然自分そっくりな貴族令嬢に異世界に呼び出されてしまう。彼女は冷血王子と呼ばれている王太子のお妃候補なのだが、彼に会うのが嫌で、芽衣にその役目を押し付けて逃げてしまう。芽衣はしかたなく王子に会うが、彼はひどい汚部屋の住人で、会うたびに掃除々々の日々を送るうちに彼の本当の姿を知り、好きになってしまう。しかし、芽衣はあくまでも身代わりで。

身代わりを強制される 1

紺色の空から、白いちいさな綿が舞い落ちはじめたのを見て、足を速めた。

正直、帰路へつく足はひどく重い。とはいえ、帰る場所はひとつしかないのだからしかたない。

「あと少し我慢すればいいのよ」

そう自分に言い聞かせ、青木芽衣は急いだ。

あと少しすれば、高校を卒業する。そうすれば、あのどうしようもない家と家族から解放されるのだ。

ひとりで、ちゃんと片づいた普通の部屋で暮らすのはどんな気持ちができるだろう。芽衣はうつとりしながら、その時のことを思い描いた。

というのも、芽衣の家族は片づけをしない、物を捨てられないタイプの人たちなのだ。友だちの家へ招かれて「普通」というのがどういうことなのか知った芽衣は、たったひとりで物の山と汚れに立ち向かい続けたが、それももう限界だった。

今日だって、休日だというのに家にいてはまともに勉強も出来ないから、市の図書館に行つて、資格の勉強をし、本屋に寄つて物件の本を物色していたのだ。

幸い、芽衣は卒業後の働き口を見つけられたが、今は色々と油断の出来ない時代だ。

そんな訳で、帰宅が遅くなってしまった。

時間は、夜七時を少しすぎたところくらいだろうか？

芽衣は足早に歩きながら、ふと前方の街灯を見やった。

雪ですこし煙った光の帯に、なにか変わった色彩が混じりこんでいる。それはまるで、ちいさなオーロラが漂っているような感じだった。

「何だろう？

きれい……」

つぶやいて、光に近づいてみる。

特に危険そうに思えなかったので、どんどん近づき、そっと手を伸ばした。

その瞬間、引つ張られるような強い力を感じ、芽衣は転びそうになった。だが、本当に転んでしまうことはなかった。芽衣の手首を、何者かがつかんだのだ。

「ひいっ！」

ひっくりかえった声で悲鳴をあげ、離せといわんばかりに手を振るが、つかんだ手の力は異様に強く、そのまま引っぱられてしまう。

目の前には電柱があり、ぶつかる、と覚悟して芽衣は目を閉じた。

けれど、いくら待っても衝撃がやってくることはなかった。

不思議に思っ て目を開けると、芽衣は光の渦のなかにいた。色とりどりの美しい光が芽衣の目を焼く。

頭が混乱して、芽衣は謎の手に引っぱられるまま渦のなかを流れていった。

やがて、前方に暗い穴がぽっかりと空いているのが見えた。

思わず恐怖に息をのむ。芽衣はそのまま暗い穴に頭から引きずり込まれ、布の山が出来ている場所へと落っこちた。

そのまま埋まっていては息が出来ないので、すぐに体を起こす。

「……ぷは、もう、何なのこれ？」

泣きたい気分であたりを見回す。

だが、それまで見ていた光があまりに強すぎて、なかなか目が慣れてくれない。けれども、何度かまばたきをくり返すうち、周囲にあるものが見えてきた。

どうやらここは室内のようで、芽衣が落っこちた場所はベッドの上だった。しかも、天蓋のついたものすごく豪華なベッドだ。他にも、高級そうに見える調度品ばかりが置かれている。

まったく訳がわからず、ただそれらを啞然として見ていると、闇のなかから声が掛けられた。

「無事に来ていただけたようですわね。よかったですわ」

芽衣は反射的に声のしたほうを見た。

そこにいたのはふたりの男女で、丸いテーブルの上に載せられた、淡いオーロラのような光を放つ水晶玉をはさんで、とても座り心地のよさそうな椅子に座っている。

芽衣は女性のほうを見てものすごく驚いた。

「なに、何で……私がいる？」
ばやくように言って、女性の顔をまじまじと眺める。

髪型や服装こそ違っけれど、その女性はそれこそ双子かと見まがうほど、芽衣にそっくりだった。明るいところでよく見れば、色々な違いはあるだろうが、とにかく非常によく似ていることに間違いない。

長い黒髪。少しつり気味のとび色の目。すっと通った鼻梁。小さな口。もしかしたら身長も同じかもしれない。肉づきや体格も似ていそうだ。

どう反応したらよいのかわからなかったため、引きつった顔でふたりを見ていると、女性のほうが、とても優雅な動作で立ち上がり、芽衣のそばまで来ると、顔を近づけてにつこりとほほ笑んだ。

「ようこそエジェルシア家へ。わたくしはクレアラベルと言いますの……あなたはなんてお名前ですの？」

「め、芽衣です」

名字まで言ったらわかりにくいように思え、芽衣は名前のほうだけ言った。

クレアラベルと名乗った女性は、にこにこしたまま芽衣の両手をとった。

「メイというのね！

ああ、来てくださって嬉しいわ。あなたはわたくしにとっての救いの神ですね。

わたくし、どうしてもあなたの力が必要なんですの」

「……は、はあ」

目を輝かせて語りだしたクレアラベルを、芽衣はうさくさげに見た。

どうやらこのひとたちこそ、芽衣をここに引きずり込んだ張本人たちらしい。

だとしたらなぜ、わざわざ電柱のところに光を漂わせておびきよせるという面倒極まりないことをしてまでここに来させたのだろうか？

そもそもここはどこなのか？

目の前にいる双子の片割れのような女性は外国のひとの名前だし、水晶玉のそばで笑っている、ちよつと貧相な男性に至っては金髪である。

それだけならまだしも、服装が問題だ。クレアラベルは淡いピンクのドレス姿だし、男性のほうも、見たことのない、例えとしたら黒いパーカーのすそが、くるぶしまで長くなったような変わった格好をしている。

なによりも、水晶玉からあんな光が出るものだろうか？
テーブルの下を見ても、それらしい装置も仕掛けもない。

芽衣がもんと頭のなかで疑問を渦巻かせていることなどおかまいなく、クレアラベルは語りだした。

「実はわたくし、もう結婚適齢期だからということ、王子殿下との縁談を勝手に進められて困っていますの。

父は、王家に娘を嫁がせたいと言うだけで、わたくしの意思なんて無視してどんどん勝手に話を進めてしまって、全く話も聞いてく

ださなくて……」

クレアラベルは瞳をうるませ、芽衣には絶対に真似できないような甘えた声でしゃべり続けた。

身代わりを強制される 2

「でも、わたくしどうしても嫌なんですの。

王太子殿下というのはそれはそれは恐ろしい方で、二年前の戦争時、敵国の捕虜の口を割るために、ひとりずつ端から首を落としてみせしめにしたんですって。

それも手ずから……。

わたくし、そんな方の妃になるなんてもう、考えただけでも恐ろしくて」

芽衣は彼女の言いたいことがわかった。

「あの、まさか……私にその身代わりになれ、と？」

心底嫌そうに問うと、クレアラベルはにこやかに笑った。

「まあ、察しが良くて助かりますわ。その通りですよ」

「お断りします。元の場所へ帰してください」

芽衣はすぐさま言った。

初対面の人間相手に、なんてこと頼みやがるんだ、と内心思いながら。でもそんなことは顔には出さない。

「あら、申し訳ありませんけどそれは出来ないんですよ。

あなたがもといた場所に魔術師がいて、その方に連れ戻していただかなければ戻ることは出来ませんわ」

クレアラベルがあっさりと言うと、芽衣は固まった。

魔術師？

手品などを行うひとたちのことだろうか？

けれどそれは、クレアラベルの言う『魔術師』とはどこかニュアンスが違う気がした。だとしたら、当然、芽衣の暮らす日本にそのような者はいないはずだ。

なにかがおかしい。なにかがずれている気がする……。

不安に駆られて、芽衣は訊ねた。

「……待ってください。ここって一体どこなんですか？」

「ヴィオンテス王国ですわ。そういえば、あなたの出身はどこなんですか？」

外見の特徴からして、わたくしの母と同じギニオスだと思っていたのだけれど……」

全く聞いたこともない名前を並べられ、芽衣はますます混乱した。

「クレアラベル様、そろそろ出発いたしませんと」

混乱する芽衣をよそに、男性が落ちついた中音の声で言った。

「あら、もうそんな時間？」

ということなのでメイ、後はよろしくお願いいたしますわね。

わたくしは今夜ここを出て、怖くなくて優しくて美しくて、わたくしを受け入れてくださる寛大な殿方を探しに行きますの。

それでは、もう会うこともないかもしれませんが、幸運をお祈りいたしますわ！」

クレアラベルはほんわかした笑顔で夢見がちに言うと、すでに窓から外に出ていた男性のそばに歩み寄った。

魔術師らしき男性は、その後すぐに下のほうへと姿を消した。

芽衣は慌てた。

こんな情報が少ないまま残り残されてはたまらない。

「ちよっ……ちよっと待つて！」

叫びながら立ち上がろうとするが、ふとんがふかふかすぎてうまく立てず、足がもつれて、ベッドの外に転がり落ちた。

したたかに背を打ち、芽衣はうめきながら窓を見やる。

けれども、そこにはふたりの姿はすでになく、カーテンが冷たい風に揺れているだけだった。

少しして、馬のいななきが聞こえてくる。

クレアラベルたちが去っていく音を、芽衣はどうしたらいいかわからないまま聞いた。

背を打った痛みと、四方八方訳が分からない状況に、笑いがこみあげてくる。

しばらくひとりで笑ったあと、芽衣は立ち上がって窓へと歩み寄った。

ここはどうやら二階部分のようだ。クレアラベルたちは梯子のようなもので降りたらしい。芽衣はとりあえず窓を閉めてから、部屋の隅をみつけてうずくまった。

部屋には暖炉らしきものがあるが、火は入っていない。だが、コートを着ているし、マフラーもしているので、多少寒さは我慢できた。スカートをはいていなかったのは幸いだったかもしれない。

芽衣は、ここを逃げ出すべきかどうか迷った。

この家のひとたちが、クレアラベルがいらないことに気づくの उस時間 はかからないだろう。その時、家人たちが芽衣を見たら、一体どんな反応をするのだろうか？

クレアラベルが変になったと思うだろうか。それとも、不審者扱いされて警察のようなどころへつきだされて、牢屋に放り込まれてしまうかもしれない。

そんなことになるくらいなら、ここから逃げたほうがいい。

理由はよくわからないのだが、ここでは日本語が通じるし、帰る方法がまったくないのか調べないと。

どうしようかと芽衣が悩んでいると、不意に入口の扉が開いた。

「クレアラベル……いるのかい？

夜遅くに悪いんだけど、ちょっと起きてくれないか。父上が呼んでいるんだ」

優しげで品のある声がした。

芽衣は青くなった。このままでは見つかってしまう。どこかに隠れないと、と思った時はもう遅かった。声の主の目が、芽衣を捉えていた。

「そんなところにいたのか。何してるんだ、具合でも悪いのか？
それとも、殿下に会いに行くのがそんなに嫌なのかい？」

声の主が、ランプをかがげて近づいてくる。芽衣は石像にでもなったように動けなかった。やがて、顔にランプの光があたり、芽衣はごくり、とのを鳴らした。

「クレアラベル……？」

現れた人物は、声の印象そのままの貴公子然としたハンサムな青年だった。

深い青色の、世界史で習ったナポレオン軍の軍人が着ていたような服をまとい、腰には細身の剣が吊るしてある。

顔は優しげで、とても整っており、ややうねりのあるプラチナブロンドの髪に、淡い空色の瞳をしているのが分かった。体格はさほど大きくなく、どちらかというと細身で、身長も芽衣より少し高い程度だった。

芽衣は困惑したまま、青年を見つめた。

「……とにかく、そんなところにはいないで出てきなさい。どうしても嫌なら、父上に頼んで延期してもらうから、ね？」

「あ、あの！私、違うんです、クレアラベルさんじゃないんです」

このまま間違われ続けるのはたまらない。

芽衣は思わず言った。青年は、何度もまばたきをして、首をかしげた。

「そついう逃げ方は良くないと思うよ……さあ、出てきて」

青年は優美な眉をひそめて、手を差し出してきた。

信じてもらえなかった芽衣は、しかたなくその手をとる。

だが、青年の説得をあきらめるつもりはなかった。

「本当なんです。

信じてください……お願いします！」

身代わりを強制される 3

必死にくりかえしながら立ち上がり、青年の目を真っ直ぐに見た。

青年は不快そうな顔をしながら芽衣を立たせると、ふと表情をゆるめる。

それから芽衣を、頭のてっぺんからつま先までとっくりと眺め、最後によくよく顔を見た。

「クレアラベル……ではないようだね、確かに。
どうしてここにいる？」

青年のまとう空気が一変した。

信じてもらえた、とつかの間よろこんだ芽衣だったが、今にも腰の剣で斬りつけられそうな雰囲気、恐怖をおぼえる。

「どうして……って、あの、私もよくわからないんです。ついさっき、訳が分からないままここに連れてこられて、クレアラベルさんに身代わりになってほしいと頼まれて、断ったんですけど、そして、その窓から、ずる長い服を着た人と一緒に出て行ってしまつて。私、どうしたらいいのか分からなくてそこに座り込んで……」

芽衣はなんとかして状況を伝えなければ殺される、と怯えながら、しどろもどろになりながら説明した。寒いのと怖いので、うまく舌がまわらないが、それでも必死に言葉を並べる。

「お願いします、殺さないください。私……自分から望んでここに
来たわけじゃ……」

「ああ、もういいよ……状況はわかった。信じるよ……いや、本当は信じたくないんだけど、君の様子を見れば嘘を言っていないことくらいはわかる」

青年は心底うんざりしたように言った。

芽衣はしばらくは身を固くしていたが、やがて青年が何もしそうないのを見てとると、ようやく肩の力を抜いた。

「まったく、嫌だ嫌だと言っていたから、なにかしそうな気はしていたけど、まさかこんなそっくりな人を見つけてくるとはね……さて、困ったな」

青年は大きくため息をつく、しばらく考えごとをするように黙りこくった。

芽衣はじつと彼を見ながら考えた。

クレアラベルの話が本当なら、芽衣に帰る手段はないようだ。

後で色々調べ、試してみるつもりではあったが、それを行うにしても、ここでの暮らしを何とかしなければならぬ。そのことについて、青年の力を借りられないものか、と考えていると、青年が声を掛けてきた。

「ちょっと……父上と相談してくるしかないか。」

え、と君、名前は？」

「芽衣です」

「そう、じゃあメイ。とりあえず客間で待っていてくれ。遅くなるかもしれないからその場合は休んでしまっただ構わないよ。温かい食事を出そう……だから、逃げようなどと考えないで欲しい」

「……はあ、わかりました」

芽衣がそう返事をする、青年は部屋の中を見渡し、化粧台のところまで行くと、置いてあった呼び鈴を鳴らした。

少しの間をおいて、使用人らしき姿をしたひとたちがずらりと現れる。

青年は彼らひとりひとりにそれぞれ違った指示を与えると、部屋を出て行く。残された芽衣は、彼らのなかでも上品な服装をした男性に連れられ、客間へと向かった。

翌朝、芽衣は耳を疑いながら、フランクと名乗った青年を見た。

結局、昨日の夜、彼が姿を現すことはなく、芽衣は出された香ばしいパンと、冷肉にスープの食事をおいしくいただき、むりやり着替えさせられたあとは、疲れて眠ってしまった。

夢で、いろいろあったけれど、もといた場所に帰れた、という内容のものを見てしまったため、目覚めたときの気分はかなり悪かった。

そのあとは、メイドと思われる女性たちに追いつてられるように食事をとり、動きにくいことこのうえないドレスを着させられ、階下の書斎らしき場所に連れてこられたのだ。

そこにいたのは、昨日とは違う服装をしたフランクと、壮年の男性で、ドレス姿の芽衣を見ると、ふたりそろって目を丸くした。

「……まったく、あの馬鹿娘が」

壮年の男性があきれたように額に手を当て、首を左右に振った。

「良く似ているでしょう？」

雰囲気こそまるで違いますが、妹をよく知らない人からすれば、妹そのものですよ」

「確かにそうかもしれない……メイ、といったか」

男性は、深みのあるしわがれた声で言った。

とりあえず「はい」と返事だけしておく。

「まずは我が愚かな娘がしたことを詫びよう。
申し訳ない」

芽衣は驚いて男性を見た。とてもそのようなことを言いそうな人物には見えなかったからだ。目の前の男性は、威厳が服を着て歩いているような人物なのである。

だが実際、迷惑をこうむっているのは本当なので、芽衣は何も言わずに耳を傾けつつけた。

「だが、このままではわしらは非常に困るのだ。
そこで、君に頼みたいことがある……」

男性は疲れたようにフランクに目配せした。

フランクはうなずいて、男性が掛けている椅子の前にあるローテーブルに置かれていた紙を拾いあげる。それから芽衣の前まで歩いてきて、口を開いた。

「さて、まずは君にいくつか質問をしたいんだけど、いいかな？」

「あ、はい。」

大丈夫……です」

芽衣は少し不安になりながら答えた。

いったいなにを訊かれるのだろう。自分の身を危うくするようなことは口走らないようにしなければ……と思ってフランクの声に集中する。

「ではまず、出身はどこなんだい？」

「えっ……と」

さっそく、芽衣は答えに窮した。

うそはつきたくない。

ひとつうそをつけば、もっとたくさんのうそを重ねなければならなくなる。

けれども、本当のことを言ったところで、信じてもらえる気もない。

芽衣は少し迷ったあと、言った。

「それが、ここへ連れてこられたショックで思い出せないんです」

「それは……すまなかったね。」

予想だと、ギニオスあたりだろうかと思ったんだが……。

その黒い髪に黒い瞳、顔立ちからすると、ギニオスか、東にある
国のどこかだと思うんだ。

……いつか思い出せる日が来るよ。

僕も協力するから、ね」

フランクは芽衣を気づかうように言った。

身代わりを強制される 4

うそをついてしまった芽衣は、それがいたたまれなくて、ちいさく「はい、そうですね」とつぶやくように言った。

「では、次の質問をするよ？」

君は今、お金が必要だろうか？」

「もちろんですよ。私、今ぜんぜんお金を持っていないんです」

これには即答できた。

なにしろ、ここで使えるお金はいつさい持っていないのだ。仕事が見つかるまでをしのぐためのお金はぜひとも欲しい。

「そうか、やはりね。じゃあ話は早い。ここにサインして」

フランクは笑顔で言っつて、紙面を芽衣の鼻先につきつけた。だが、芽衣にはなにが書いてあるのか読めない。アルファベットに似ているような気がする文字がならんでいるが、ただそれだけだ。

「なんて書いてあるんですか？」

「……ああ、失礼。」

これは契約書だよ。たとえどんな理由があろうと、逃げださないこと、投げださないこと。その代わり、君の生活に必要なあらゆるものはエジェルシア家が保証するというものだ」

芽衣は内容を聞いて顔をしかめ、不審な人物でも見るようにフランクを見やる。

あからさますぎる内容だと思ったからだ。フランクは良いところ

ばかり説明し、リスクについてまったく言わない。それが怪しい。

「逃げださない、投げださないとわざわざつけ加えるということは、そうしたくなりそうな頼みごと、ということですか？」

いぶかしげな視線を向けたまま問う芽衣。

フランクは答えにくそうに視線をそらす。彼の視線は窓の外や、本棚などをさまよい、なかなか芽衣に戻ってこない。

その様子から、芽衣はなんとなく彼の言いたいことの想像がついた。

嫌な気分だ。

契約書面をつくったりして、金がないことがあきらかな芽衣を釣るようなやり方が、ある意味クレアラベルよりタチが悪い。

「はつきりおっしゃってください。

お言いになりたいことはなんとなく察しましたから」

芽衣はフランクを睨みながら言った。

すると、彼はきまり悪そうに笑う。

「そうだね、はぐらかしても意味がないね。

……君に頼みたいことというのは、クレアラベルが見つかるまでの間だけ、身代わりを頼みたいということなんだ」

フランクは、すつ、と真剣な表情になって言った。

「君は断ることもできるが、女性がなんの後ろ盾もなく、ひとりで

生きていくというのは優しいことではないよ。たとえお金があったとしても、力ずくで取りあげられればおしまいだし、場合によってはだまされることだってある。

だけど、この頼みごとを引き受けてくれれば、君はすこしの間だけとはいえない暮らしができるし、すべてが終わったあとも、生活に困らない程度の援助は約束しよう。

悪い話ではないはずだよ」

そう、その通りだ、と芽衣は思った。

それでも、不愉快であることに変わりはなかった。

頼みごと、などと言っではいるが、これでは脅してやらせることとなんら変わるところがない。言葉上でこそ優しいが、引き受けなければどうなっても知らない、と言っているのだから。

芽衣は、あまりの理不尽さに、逆に闘志がわいてきた。

運命の女神が、まあそんなものがいればの話ではあるが、芽衣をここまで嫌うのなら、いつそのこと戦ってやろうではないか。

いつか自分の求める幸せを手に入れて、目にも物を見せてくれる。

「そうですね、悪くはないです。

その代わり、約束はきちんと守ってください」

芽衣が挑戦的に言うと、フランクと男性は、肩から荷がおりたような様子で互いに目配せしあう。

そして、フランクは窓際に置いてある書きもの机からインク壺を持ってくると、それを芽衣に差し出した。

「では、サインの代わりに拇印をもらおうよ」

芽衣はうなずいて、右手の親指をインクにひたしたあと、紙に押しつけた。

これで契約は終了した。

もう逃げることは許されない。

「押しました。

……私はまずなにをすればいいんでしょう？」

「そうだね。

まずは礼儀作法、話しかた、歩きかた……令嬢に求められるすべてを学んでもらわなければ、宮廷に連れていくこともできないから、まずはそれらをひとつひとつ覚えてもらうことにしよう。

家庭教師もすぐに手配するから、明日から本格的にはじめよう……でも、あまり時間はないよ。クレアラベルがないことが周囲に知られてはまずい。

及ばずながら、僕もできることは協力するし、使用人たちにもかまわず、何でも聞いてくれていいからね」

「わかりました、努力します」

指についたインクを、フランクが渡してくれた布でふきとりながら芽衣はうなずいた。

とんでもない難題を与えられたが、落ち込むどころか、芽衣はなんと少しでも乗り越えてやる、と決意を固くした。

この難題を乗り越えさえすれば、欲しいものが手に入る。

そう、ごみの山と、黒くかたまつたほこり。舞いあがるダニの死骸。カビの生えた服。すえた匂い。べたべた貼られたシール。ガムテープで補修されたあらゆる物体。色柄があふれすぎているため、目がチカチカして頭が痛くなるあの空間。

あれから解放されるなら、場所はどこでもかまわなかった。
どのみち、家はあるつもりだったのだ。
それが少し早まったただけだ。

帰れないなら帰れないで、ここで欲しい暮らしを手に入れてやるぜ。そんな思いで、芽衣はレディに変身するための教育に挑む日々を開始したのだった。

王太子に会う 1

淡いブルーのドレスに身をつつみ、スカートの裾をつまんで足を小さく折り、首をかしげて優雅にあいさつをすると、フランクとメイドの少女が歓声をあげた。

芽衣は心のなかで得意になった。

「すごいです！

これならどこからどう見てもクレアラベル様ですよ！」

メイドが嬉しそうに言う。

彼女はずっと女主人を完璧に装わせることに心血を注いできたのだが、クレアラベルは好みがうるさく、自由にさせてもらえなかったのが不満だったのだと語った。

だが芽衣はそもそも衣装については右も左もわからない。

そのため、彼女の自由にさせたところ、非常にやりがいがあるといって喜んでくれた。そんなふうにメイドと打ち解けられたことが、芽衣にとっては、クレアラベルの細かなクセや、好みなどを知ることができる機会になり、とても助かったのである。

あれから二週間。

芽衣はがんばった。とにかくがんばって努力しまくった。ひたすらがんばった。

優雅な動作になかなかなじめず、教師にはしょっちゅう手の甲を

叩かれる。

ありえないところが筋肉痛になる。
精神的に疲れてしまうのと、痛みで眠れなかった日もある。

レディとやらに求められる言葉づかい、余計なことと言わない、遠まわしにそれとわからないように言う、という決まりごとに苛ついて、雄叫びをあげながら、壁にクッションをぶつけまくった夜もある。

ドレスの裾につまずいて、床の上に転がったのはいったい何回だったろう？

常に笑みを浮かべていなければならぬのも苦痛だった。
頬が筋肉痛になるというのははじめての経験である。

その逆の、鬼のような形相なら簡単だったのだが。なにしろ、家のなかを掃除していると、自然とそんな顔になってしまふのだから、それでもすべてを乗り越えて、芽衣は王宮に連れて行っても恥をかかないくらいの所作を身につけた。

「いよいよなんですね……間に合って良かったです」

笑みは絶やさず、芽衣は言う。いまではたやすくこの顔をつくれる。目は笑っていないので、この役割が終わった後も役に立つかは疑問だが……。

フランクは芽衣の出来栄を見て満足そうにうなずき、言った。

「さあ、覚悟はいいね？」

「はい！」

芽衣は勇ましい気分で返事をし、彼が差し出してきた腕をとった。ずらり、と並んだ従僕やメイドたちに見送られ、すっかりなじんだエジェルシア・ハウスのエントランスを抜けて、外に出る。

陽射しがまぶしい。

朝の澄んだ空気を肺いっぱい吸い込んで、停めてあった二頭立ての箱型馬車へ乗り込む。

馬車というと結婚式の、屋根のないものを想像していたのだが、今芽衣がのりこんだ馬車は、それこそ箱のなかに入るような感じのものだった。

フランクが御者に馬車を出すように命じると、馬車はゆっくりと動きだした。

芽衣は小窓をのぞきこみ、のんびりと流れる風景をぼんやりとながめる。

さすがに、ずっと気をはっているのは疲れるのだ。黙々と体を動かしているほうがまだ疲れない。どうせ王宮へ行けば気を使わなければならぬことだらけだろう。

せめて今くらい、ぼうつとしていたかった。

フランクは特に声をかけてこない。

言っておきたいことはこししばらくのあいだに言いつくしたのだ

ろう。

出来ることは協力する、と宣言した通り、彼は口も出せば手も出し、芽衣はひきずりまわされっぱなしだった。とりわけ、面倒なダンスレッスンの相手役はほとんどフランクがつとめてくれたが、足を踏んでしまったびに怒られ、余計にぐるぐると回されて吐きそうになったことを思い出す。

フランク・エジェルシア、という青年は、見た目とは異なり、ずいぶんとアグレッシブな人物だということを、芽衣はとことん痛感した。

まさに人は見かけによらない、である。

そんな苦労の成果は、これから試されるのだ。

やがて、窓の外を流れる風景も、街並みから緑の多い静かなものへと変わり、ゆつくりと馬車が停止した。どうやら王宮へついたようだ。まず御者が下りて、馬車の扉をあけると、フランクが先に降りて、手を貸してくれた。ドレス姿になってみてはじめて、それが本当にありがたいものだということがわかる。

馬車の外に出ると、身のひきしまるような冷気をともった風が吹きつけ、芽衣は体をすくめた。寒さにいったん閉じた目をあけると、眼前に美しい宮殿が姿をあらわす。

暖かい季節になれば、夢のように綺麗なのだろう前庭は、左右対称にととのえられ、低木で模様が作られ、すべての木はすっきりと刈り込まれている。小道も整備され、のんびり散策が出来るようになっていた。

その前庭をまっすぐにつらぬく石畳の道にあわせて視線を移動させれば、白い壁が目にはばゆい、まるで、大きなホテルを横に倒したほどもある、壮麗な建物が視界をいっぱいにうめつくす。

屋根は空にとけこむ空色で、アルプスの山が連なるようにいくつも連なっている。

芽衣はしばらく見とれた。

王太子に会う 2

「美しいだろう？」

歴代の王が、富を惜しみなく使って作らせた宮殿だ」

フランクはやや皮肉な笑みを浮かべた。

だが、それはすぐに消えてしまい、彼は芽衣をうながした。

「行こう。今日は会議がないから、殿下は自室兼執務室で政務にあたっておられるそうだ。そこでお前にお会いになるという。僕は他に用事があるのでついて行ってやれないが、くれぐれも粗相のないようにね」

「はい。全力を尽くします」

芽衣はうなずいて、フランクとともに正面階段をのぼり、警備兵たちのあいだをぬけて、宮殿に足を踏み入れた。

とたん、目がチカチカした。いたるところに金箔が使われ、大きな面を持つ壁にはきらびやかな壁画が描かれ、天井には子どもに羽の生えた彫刻が何体もある。

天使だろうか？

なんだか異次元に来た気分だ。

まあ、芽衣の状態も似たようなものではあるが、それでも、よくこんな場所で暮らして疲れないものだ、と思った。

まだ早い時間だからか、宮殿の中は閑散としていた。

しばらくそこに立っていると、ふたりの姿をみとめた従僕や侍女たちが近寄ってくる。うちひとりの侍女が声をかけてきた。

「ようこそいらっしゃいました。」

シュディラント侯爵ご子息、フランク様とお妹君。殿下がお待ちでいらっしゃいます。ここからはわたくしがご案内をつとめさせていただきます」

侍女は丁寧な、かつ淡々と言って頭を下げる。

「では妹を頼みます。僕は用事があるので失礼させていただきます」

フランクは爽やかにそう言い残すと、ひとりでさっさとどこかへ歩き去ってしまった。心なしかうきうきしているように見える。誰か会いたいひとにでも会いに行くのかもしれない。その背を見おくつてみると、芽衣は侍女にうながされた。

「行きましょう。殿下がお待ちでございます」

芽衣はうなずいて、侍女に続いて歩き出した。

そして心のなかで、これから会う王太子について知りえた情報を思い返す。

王太子殿下は名前をレナード・ガリエールといい、年齢は二十五歳。かなり若いが、とても有能で、先の戦争では、自ら軍を率いて戦い、連勝を重ね、大規模な国土拡大という偉業を成し遂げた。

容姿にも優れ、縁談は今でもひきもきらない。しかし、本人は他国との縁戚関係をことさらに嫌がり、何人もの貴族令嬢と、いわゆるお見合いをして、良い相手を探しているのだという。

だが、令嬢たちは彼に会うなり、青くなつて震えながら戻つてくるため、まともに話もできず、お見合いが終了してしまうそうだ。いままで二度、王太子と謁見できた令嬢はいないというから、芽衣も内心どきどきしていた。

いったい、レナード・ガリエールとはどのような人物なのだろう。

芽衣は、壁を埋めつくそうとしているとしか思えないくらい大量に飾られた絵画や、隅があればすかさず彫刻がほどこされている飾りだらけの廊下をぬけ、足元に絨毯の敷かれた階段をのぼり、用途別、たとえば会議室や、読書室、音楽室などの部屋の前を通り、ようやく王族が住居として使っている棟についたときには、すでにやや疲れていた。

なんなのだ。この嫌がらせとしか思えない広さは。

疲労は顔に出さないようつとめながら、芽衣はそう思った。

「ここでございます」

そんなことを思っていると、突然侍女が、なんのまえぶれもなく立ち止まり、振り向いてぎこちない笑みを浮かべながら言った。

芽衣はあやうく彼女にぶつかりそうになったものの、なんとか足をとめ、周囲を見まわして首をかしげた。しかし、部屋の扉らしきものはいつさい見あたらない。

「あの、どちらでしょうか？」

かすかに困惑を匂わせながら訊ねると、侍女は、ある場所をてのひらで示した。

芽衣はその手をたぐるように視線を先へとうつし、思わず笑みを消す。

なんだろう。何も見えない。

いや、見たくないのだ。

見えたくもないし、見たくもない。

だが、心の悲鳴を押し殺して、視界をちゃんと機能させると、一応、扉らしきものは見えた。だが、肝心の扉は開きっぱなしで、扉としての用をなしていない。

理由はとても単純だ。ものがあふれすぎているため、閉まらないのである。

本や、羊皮紙のたぐいは理解できる。

フランクは、王太子殿下の「執務室兼自室」と言っていたから。

しかし、どう見てもそこにある必要のないものまで置かれているではないか。

例えば、壊れた彫像、血のついた傷だらけの盾。たたまれている、ホコリよけにでも使われているらしいタペストリ。よくわからない布のかたまり。足が一本折れたイス。何に使うのか見当もつか

ない木の棒。焦げた旗。かびた絵画……。

あげていけばきりがない。

「まさか……」

芽衣はうめくように言って侍女を見た。

彼女はあきらかにそこを見ないようにして言った。まるで、見たら目が腐り落ちると信じているかのようである。

「あのお部屋が、殿下の執務室兼自室でございます」

肯定してほしくなかったのに。

否定の言葉を待っていたのに。

あれはただの物置部屋ですと言って欲しかったのに。

芽衣はめまいがしてきた。

やはり、自分とはことん運命の女神に呪われているようだ。

激しいデジャヴに笑いだしたくなってくる。

ああ、ここにブルドーザーで思いっきり突っ込みたい。そうすれば清々するだろうに。

なぜ、別世界に来てまで、汚部屋と向きあわなければならないのだ。

怒りと絶望感と泣きたい気分で顔がひきつる。

「で、ではわたくしはこれで失礼いたします。

お帰りの際は、誰かにお声掛けくださいませ」

「そ、そんな！　ちよつと待っ……」

芽衣は引きとめようと手を伸ばしたが、侍女はすさまじいスピードで歩き去っていく。

走っていないというのに、なんという速さだろう。そんなにここにいたくないのか。だが、それは当然だろうと思われた。

おそろおそろ、そこを見やると、なんだか冷たくて臭いような、例えるなら「妖気」のようなものが漂っている気がする。

こんな光景を見た日には、蝶よ花よと育てられてきた神経が細そうな令嬢たちはどのような反応をしたのだろうか。なんとなく、予想はつく。

もしかしなくても、彼の縁談が円滑に進まない理由はこれなのかもしれない。

「逃げないわよ」

芽衣は自分を鼓舞するように言った。

王太子に会う 3

長きにわたり、汚屋敷に暮らしてきた庶民の娘の神経をなめるな。

妙に勇ましい気分で、芽衣は歩きだす。

もちろん、音をたてぬよう、すべるように静々と歩くことも忘れない。

扉が近づいてくる。足元にものが増え、ぶつからないように歩くのがだんだん苦勞になってきた。けれども、がらくたの樹海のなかに、たった一本、けものみちのように細くまがりくねったすきまがある。どうやらここを通して出入りしているようだ。

芽衣は覚悟を決めて、そこにそつと足を踏み入れた。

「……誰だ！」

途端、大きな声がして、芽衣は危うく転びかけた。

あぶない、あぶない。こんな場所で転んだらどんなけがをするかわからないというのに。思わず声のしたほうを睨むと、人影がゆらり、と動いて、思わず息をのむ。

「何だ、おまえ……？」

ああ、そうか、シュディラント侯爵の娘か」

深みのある、低くて張りのある声。耳にとても心地よいその声は、どこかうっとうしそうだった。人影はものうげに、ゆらり、と立ち上がると、昼間だというのに、カーテンを閉めているせいで薄暗い

室内からゆつくりと出てきた。

芽衣は思わずあとずさる。相手の妙な迫力に気圧されたのだ。

話に聞いていたとおり、あらわれた青年は美しかった。

目にかかる程度にやや長い、濡れたようにつやめく、濃墨色こすみいろの髪。冷たい印象をあたえる切れ長な、緑がかった灰色の瞳。すつと通った高い鼻梁。唇はあざわらうように曲げられているが、そんな表情をしても、決して品がそこなわれていない。

背は芽衣より頭ひとつ以上高い。

肩幅もかなりあり、服の上からでも鍛えているのがわかった。

彼は芽衣の前に壁のように立ち、上から押さえつけるようににらんでくる。

「はじめまして、お会いしたかったですわ、殿下」

押しつぶしてくる視線など、弾きかえしてやる、と言わんばかりの気合をこめ、芽衣はほぼえんだ。それに、会いたかったというのは本当のことだ。

彼のうわさ話をひとつ耳にするたびに、いったいどんな人物なのか、見てみたくてたまらなかったからである。そして、目の前に立ちはだかるレナードは、芽衣が想像していたよりもずっと冷たい雰囲気をしており、体も大きかった。

芽衣はいよいよだ、と思った。

本物のクレアラベルが見つかるまで、この王太子との仲をこじれさせ、終わらせてしまっ**て**はならない。あくまでも、交替するまでのあいだだけ、フレンドリーにつきあっておけば良いのだ。後でクレアラベルがどうしようと勝手だが、とにかく、芽衣が彼の機嫌をそこねるわけにはいかない。

芽衣の頭のなかで、試合開始のゴングが鳴った。

「ずいぶんと素晴らしいお部屋ですわね。

まだお仕事をされていらしたのでしょうか？

そうでしたらわたくし、ここにあるものを眺めてお待ちしておりますわ」

ついでに皮肉もこめてそう言うと、王太子の顔に驚きの色がひろがる。

それはそうだろう。芽衣の予想では、今までここにやってきた令嬢たちは、まずこのありさまに驚き、もしかしたら怯えもしたかもしれない。さらに呼びかけてみれば、中から地獄の使者よろしく、黒い服をまとった大柄で迫力のある王太子がゆったりした足取りで出てくるのだ。完全にホラーである。

生まれてから一度も、こんな惨状をみたことなどないだろうご令嬢たちの神経では、気絶するか、逃げだしてもおかしくはない。

レナード王太子は、デザインこそフランクの着ていたものと似ているが、ほとんど黒に近い緑の服を着ている。肩には、金糸をふんだんに織り込んだ暗赤色の、豪華な金欄きんらんの長布を掛けていた。その姿は、すでに彼がこの国の王であるかのようにも見える。

ただ、ひとつ違和感のあるものがあつた。
腰に革のベルトで吊るしてある剣だ。

きらびやかな衣装のなかで、それだけが浮いている。柄にも、鞘にもまったく飾りがなく、完全に実用一点張りのつくりだ。見た感じでは、サーベルだろう。握りの部分は手脂で汚れ、酷使されたあとがうかがえる。

「……お前は、これを見ても平気なのか？」

驚きと疑いに満ちた声で、レナードが言う。彼の不審な目つきが、今に倒れるのではないだろうか、と語っている。

「もう少し、整理整頓されたほうが良いとは思いますが」

芽衣がそう言うつと、彼はなにかふしぎな生き物でも見るような顔をした。

「そうですね、例えばこれなど、もう少し汚れを落とせば……」

言いながら、床に打ち捨てられたかのごとく無残にころがっている、見るからに高そうなつぼに手をのばすと、レナードが血相を変えて叫んだ。

「さわるな！　そこに置いておくんだ……いいか、この部屋のものに勝手にさわってみろ、ただではすまされないぞ」

つぼと芽衣の間に割って入りながら、強くにらみつけてくる。

なんだろう、この激しいデジャヴは。芽衣はなにやら強いイライ

ラを感じた。

脳裏につきつきとよみがえる、家族の声。

「そこに置いとけばいいんだよ」

「ここに置いておきたいの」

「移動させたら怒るから」

「そこにあるのが一番具合がいいんだよ」

「あとでやるから置いといて」

何度となく聞いたセリフの数々が、耳のなかで勝手に再生された。

王太子に会う 4

なぜ、それらのものをそこに置いておかねばならなかったのだらう。

使い終えたカイロ。読み終えた雑誌。食べ終わったカップ麺の容器。まるめたティッシュ。前日や前々日の新聞。使われたあとの汚れた食器。などなど。

芽衣にはまったく理解できなかった。

洗濯機に放り込め、シンクまで持っていけ、ごみ箱にいれとけ。そう怒鳴って何度ケンカをしたことが。

いけない。ここは家ではない。しかも、相手は王太子。機嫌をそこねたらまずい。そうなったら、それはそのまま生活の危機だ。けれど、胸のうちでくすぶりはじめたいだちは、理性の網をずるりと抜け、ぽろりと口から飛び出てしまった。

「あら、それは失礼いたしました。では、そのつぼが、その場所にどうしても、なにがなんでも、絶対に、必ず、置いておかなければならぬ理由をおうかがいしてもよろしいでしょうか？」

レナードは、反論しようと口を開くが、言葉がでてこないようだ。芽衣は、言ってしまったことを少し後悔したが、それでも、気分がすつとしたのは事実だった。

「……あ、後で片づけるときに、目につきやすいほうがいいと思っ
てだな……」

「では、ここに置いておく必要はないんですね？」

「いや、今はある。私が移動するまでは、目立つ場所がないと困るんだ」

「それなら、今すぐに移動しても変わりありませんわよね。」

「良い機会ですから、今日動かしてしましましょう。たとえば、一日にひとつだけでも移動させれば、このお部屋も見通しが良くなりますわ」

まるで子どもの言いわけのようなセリフを吐くレナードに向け、芽衣は逃げ場を少しずつ奪いとりながら語りかけた。王太子殿下は、あきらかに怒鳴り散らしたいような顔をしている。

「いや、今日は無理だろう。あなたのお相手をしながら、そのようなことをするなど、レディに対して失礼なことだ」

芽衣は呆れと疲れを同時に感じた。

よくもまあ、逃げ道をつぎつぎと見つけてくるものだ。その頭の回転の速さを、どうして片づけるほうに持っていないのか。そこがふしぎでたまらない。

「あら、わたくしは構いませんわよ。」

お時間が気になるようでしたら、さっさと動かしてしまえばいいじゃないませんか。私の国では、思いたったが吉日、という言葉もあるくらいですし、後回しにするといいことありませんわよ」

それでも、芽衣はねばり強く言い続けた。

「いや、今日はあなたのお相手に集中したい。」

なにしろ、これを見て卒倒しなかった、さらに言うなら、逃げださなかったご令嬢は、あなたが初めてだ。だから、今日は絶・対に

動かす気はない」

こころなしか、絶対、のところを強調して言ったように聞こえた。

逆らうなら逆らってみろ、とレナードの目が語っているようだ。

もちろん、本音を言えば思いつき逆らいたい。だが、芽衣の状況判断能力が、口をつぐませた。

ここで文句をつけて追い返されるようなことになれば、これからの生活が危うい。

さすがに閉口した芽衣を、レナードはやりこめた者特有の、優越感に満ちた目で見てくる。悔しいが、仕方ない。それに、この状態で放っておいて困るのは、芽衣ではなく、目の前で笑いに笑みをうかべている王太子の方だ。

その時、芽衣は気づいた。

レナードが、少し前から、首のあたりに手を伸ばして、服の上からかくのを。しばらくもの問いたげに見ていると、どうやら他にもかゆいところがありそうだ。

芽衣は確信した。

この王子様、ダニにかまれたな、と。

そうでなくとも、物の山にうもれているせいで、ごく一部のみがかろうじて見えている寝台には、近づくことじたい、かなりの困難をとこなう。あれでは、シーツを換えるのも一苦労だろう。

そのうえ、室内には昼間だと言うのにカーテンがひかれているので、陽光がはいりにくくなっており、湿気がたまっていそうだ。しかも、寝具を干そうにも、寝台に近づくだけで息切れしそうなのに、

部屋の住人による妨害まであるのだから、どうしようもない。

「気が済んだか、レディ？」

済んだのなら、サロンへ案内しよう。いつまでも、レディがこんなところにいるものではない」

その通りだ。ここは、レディのいていい場所ではないだろう。

しかし、芽衣はレディもどきだ。

「……いいえ、まだ気は済んでいません」

がんばってつくりあげた笑みが、ゆつくりと消えていく。

全身の血液を沸騰させるような怒りが、芽衣の全身にひろがった。許せない。どうしても許せない。

惨状を眺めれば眺めるほど、このままおめおめと負けてたまるかという気持ちになる。

もはや我慢の限界だ。

芽衣は覚悟を決めた。

こうなったら、人生を掛けて掃除をしてくれる。

一気にことを進めるため、まずは全身に力を入れる。けものみちくらいしか幅のない道を睨みつけ、スカートをつかんで、ひざから下をむきだしにすると、芽衣は走って寝室へ踏みこんだ。

王太子に会う 5

レナードが制止するひまは与えない。

芽衣は寢台へ駆けよると、息をとめて、上掛けとシーツを一緒にはぎとった。

たまりにたまったホコリがもうもうと舞いあがり、室内にたちこめる。

「何をしている！ やめろ！」

レナードが血相を変えて駆け寄って来る。彼は必死に寝具を奪い返そうとした。

芽衣はそんな王太子の必死な顔をにらみつけると、ぶち切れて怒鳴りつけた。

「何よ！ 何かするならすればいいでしょ、この大馬鹿王子！
こんなごみ溜めで寝ていれば、体がかゆくなって当り前じゃないの。」

そのうち変な病気にかったら、私のしたことに感謝するわよ。
もし私を殺したら、その時は天国から嘲笑ってやるから！

このふとんは洗って干して、消毒するわ、邪魔はさせないわよ！
芽衣は、ホコリの乱舞がやや収まってきたのを見計らい、荒く息をした。

それでも、のどはザラついてしまった。

真っ向から対峙したふたりは、しばらく無言でけん制しあう。

先に口火を切ったのはレナードの方だった。

「すぐにそれをもとに戻せ。でなければ近衛を呼び、牢に放り込ん

でやる！」

「なによそれ、なんであなたの健康を心配して牢に入れられなきゃならないのよ。今の状態が悪いつてわかってるのに、改善の努力をするどころか、維持しようとするなんて、最悪だわ！」

「俺はこの状態が悪だなどと思っていない。その寝具でなければ眠れないから言っているんだ。さっさと戻せ！」

「洗濯して乾くまでのあいだくらい、眠れなくたって死にはしないわよ！」

長い手をのばしてくるレナードに、なんとしても寝具を渡すまいとして、芽衣は寝台の上にのぼった。そこにもホコリがたまっており、むわっ、と舞いあがって、芽衣はまた咳きこんだ。そのすきについて、レナードがシーツをひったくろうとする。

それに気づくと、芽衣は近くのクッションやまくらをつかんで、レナードの顔めがけて投げつけた。

古いクッションの布地はもろくなっていたらしく、投げたときにやぶれ、ぶつかった瞬間に詰め物の羽根が飛び散った。室内に羽根が舞い、まるで、ごみ捨て場に天使が下りてきたような、なんともミスマッチながらも幻想的な光景がひろがる。

それには目もくれず、芽衣は退路を探した。

レナードは羽根が口や鼻に入ったようで、なにか悪態をついている。やんごとない人物の発言とは思えないようなことを言っているが、芽衣にとって今は逃げだすチャンスなので、まったく耳に入っていない。必死に部屋を見渡して、通れる道を探す。

だが、懸命に探しても、モノがあふれかえっていて、道がない。別世界に来てまで、汚部屋製造人に屈しなければならぬのだろうか。

そう思つて唇を噛んだとき、誰かが拍手した。
芽衣とレナードは、同時に音のしたほうを見る。

「いやあ、お見事。殿下、そのお嬢さんの言うとおりですよ」
拍手をつづけながら、その男性は言った。
理知的で、優美な雰囲気的人物だ。

長く、くせのない、明るい茶色の髪をうなじのあたりでひとまとめに束ね、左目には片眼鏡をかけている。彼は、その優美さにはどこかそぐわない、濃い茶色のコート姿をしており、黒い革のブーツと、腰につるした銀白色のサーベルが目を引く。脇には書類らしき紙の束をかかえているので、芽衣は秘書であるかのような印象を抱いた。

「勝手に入つて来るな、と言つておいたはずだぞ、エルバート」

エルバート、と呼ばれた男性は、唸るレナードを気にする風もなく、慣れた動きでモノをよけながら部屋に入つてくると、苦笑いを浮かべる。

「そうですね。確かに言われました。ですが、私の方は、ご命令に従います、とは言つておりません。だいたい、勝手ににもなにも、この部屋の扉はいつも開けっ放しじゃありませんか。

扉にも触れないから、ノッカーにも近づけないですし、以前に仕方なく、大きい声でお呼びしましたところ、うるさい、静かに入つて来い、とご命令になられたことはお忘れですか？」

彼は呆れたような口調で、あっけらかんとそう述べた。

エルバートの言葉に、さながら、獅子のように唸りはじめるレナード。

そんなレナードを、ちらり、と見やって、エルバートはため息をついた。やがて彼は、さまざまなものが載りすぎていて、テーブル

なのか机なのか、さっぱりわからなかった台に歩み寄り、積もったホコリと紙くずを払い落すと、持ってきた紙束をその上に置いた。それを見て、ようやく執務机だったのだ、とわかる。

芽衣は息をひそめながら、エルバートの動きを目で追った。

言葉から判断すると、彼はレナードの側仕えらしい。となれば、芽衣から寝具をとりあげてしまうかもしれない。さきほどはああ言っていたものの、彼が芽衣の味方についてくれるとは思えなかった。レナードに寝具を奪い返されないよう、警戒はおこらないまま、エルバートを見つめ続ける。

しかし、エルバートは、特に芽衣の行動を非難している様子はない。

「この、ぬけぬけと……ふたりともさっさと出て行け！

だが、寝具は置いていくんだ！」

レナードがしびれを切らしたのか、叫ぶように言った。

「言われなくても出ていきます。でも、これは洗濯場へ持っていくわ」

芽衣は鼻息も荒く言い返した。

すると、その芽衣のそばへ、エルバートが歩みよって来る。寝具をとりあげられるのでは、と思い、芽衣は身じろぎした。だが、逃げ場はない。しかし、エルバートのとった行動は意外なものだった。レナードとのあいだに立ち、芽衣を守るように、背中を向けて立っただのだ。

芽衣は思わず「え」と、つぶやいていた。

このひとは、味方になってくれるのだろうか。芽衣は期待を込めて、フランクよりはたくましく、レナードよりは細身な、その背中を見つめた。

「殿下、ここは彼女の言うことを受け入れるべきです。この私が、
ずっともぞもぞしているあなたに気がつかないとお思いですか？

皮膚のあちこちに、ちいさな赤い点があることを知らないとしても
？ 幼少からお仕え申し上げてきたこの私が気づかないわけがない
でしょう！ いいですか、私たちは殿下をそのかゆみから解放して
さしあげるために、あなたに逆らっているのですよ！」

エルバートは、どこまでも真剣な声と顔で、演説でもしているみ
たいに言った。

場に、沈黙が流れる。

王太子に会う 6

エルバートの後ろで、芽衣はこっそり安堵した。良かった、どうやら、彼は味方のようなのだ。それに、心からレナードを心配しているようだ。

けれど、怒りと羞恥で、わなわなと震えているレナードを見て、芽衣は思った。果たして、彼が言うことを聞いてくれるだろうか？

家族たちは、掃除をする芽衣を責めた。モノを捨て、整理整頓し、掃除をすることがどんなに住むひとの健康を守ることになるのか、いくら説明してもわかつてはくれなかった。のみならず、まだ使えるモノや、思い出の染みついたモノを捨てるなんて、ひどい、冷たいとののしられたのだ。

芽衣は固唾を飲んで見守った。

そして、思った通り、レナードは顔を赤くして、激しく怒鳴った。

「出ていけ！ お前も裏切り者だ！ もう二度と顔を見せるな！」

怒声のあと、空を切って花びんや木片が飛んでくる。

芽衣は慌てて逃げだした。それでも、寝具はしっかりと持って放さない。

エルバートも同時に逃げだしていた。

ふたりはモノが飛んできても当たらないくらいの距離まで逃げから、どちらからともなく立ち止まった。何となく顔を見合わせる、と、エルバートがすぐさま礼を言った。

「本当にありがとうございます。正直、あなたのようなレディがいるとは驚きでした。この寝具は、私が洗濯場へ持っていきますね」

「あ、はい、お願いします。あの……申し訳ありません、本当は、あのようなことを申し上げるつもりはなかったんですけど」

そう言って、寝具を彼に渡すと、芽衣の胸に後悔という名の痛みがひろがった。一瞬の怒りに我を忘れ、すべてを台無しにしてしまったのだ。おのれの意志の弱さを、芽衣は憎んだ。

「いいえ！ 言うてくださって私は嬉しかったです。殿下は、怒ると恐ろしい方ですから、皆、本気であの方に向かっていこうとは思いません。どうか、今回のことにこりずに、何度でも殿下をお訪ねください」

芽衣はエルバートの言葉に、うつむけていた顔をあげた。

これで、終わりにならなくてすむのだろうか？

自分の異世界快適ライフへの道は、まだつながっているのだろうか？

「あ、あの！ 本当にまた殿下をお訪ねしてもよろしいのですか？ 私、きつと今回のことで殿下には完全に嫌われてしまったと思っているのですが……」

「もちろん大丈夫ですとも。ああ見えて、実際の殿下はとても優しいお方なのです。むしろ、その優しいお心が、今はあだとなつてしまわれているのですが……」

彼はそう言うと、悲しげに眉根を寄せた。しかし、すぐにもとの

表情に戻って言葉を続ける。

「まあとにかく、あなたの行為が、ご自身の健康を心配してのことだ、ときちんとわかっていただければ、またの訪問もお許しくださいますよ。そうですね、訪問の日には、私がエジェルシア邸へ出向いて、お知らせいたしますから。」

ですから、必ず、またお訪ねください。きっと、あなたのお力を借りれば、殿下をあの状態からお救いさしあげられるかもしれないのです、お願いでございます……」

「……わ、わかりました。また必ずお訪ねすることをお約束します」

エルバートの熱意あふれる声に、芽衣はうなずいた。なんだかうなずかなければ悪いような気分になる。それでも、と芽衣は思った。これで終わりにならなくてすむのなら、むしろ良いことなのではないだろうか。何より、あの様子だと、王太子は他にもまだ、体に不調を抱えていそうだ。芽衣しか、それを指摘し、ついでに改善してあげられないのなら、引き受ける価値は十分にある。

芽衣は希望が戻ってきたように感じて、やる気がわいてきた。

「それでは、本日はこれにてお暇させていただきます。そうだ、ぜひお願いしたいことがあるのですが……」

正直に言うと、このドレスはとてもきれいだが、ひどく動きにくい。次に来たときも、今日と同じような戦いになるのなら、この装いではないほうがいいと考えたのだ。

「何でしょう？ 私に出来ることであれば、なんなりとお申し付けください」

エルバートは、礼儀正しく言った。

芽衣は笑みを深めて、次なる訪問に必要となるかもしれない、アレや、コレの用意を、エルバートに頼みこんだ。最初はすごく驚いていたものの、それでも、芽衣の意図を察して、エルバートは快諾してくれた。よし、あとは計画をじっくり練るだけだ。

「それでは、お願いいたしますね」

「はい、かしこまりました。それでは、また」

エルバートは、？また？を強めに言ってから、去っていった。洗濯場へ向かったのだろう。

芽衣は、ふっ、とちいさく息をついてから、歩き出す。

疲れた。

侍女か侍従を見つけて、フランクも戻るようなら、一緒に戻ろう。そして、エルバートの言葉通り、次があることを信じて計画を練ろう。

なんだか楽しくなってきた。

向こうにいた時には果たせなかった、汚部屋を普通部屋にする、という夢。ここで果たせるのなら、なんとしてでも果たしたい。芽衣の人生に、汚部屋や汚屋敷が常に立ちはだかるといふのなら、ちぎっては投げ、ちぎっては投げ、戦いつづけ、いつか勝利を手に見せる。

そう思いながら意気揚々と歩いていると、やってくる従僕を見つ

けた。手が空いていそうだったので、芽衣は彼に声を掛け、帰るの
で馬車の支度を、といかにもレディらしく言いつけ、待機していた
御者とともに、エジェルシア・ハウスへと戻ったのだった。

本日の幕を閉じる 1

芽衣が館へ戻り、夕食に向けた支度が終わったところ、フランクが戻ってきた。

なにやらぼんやりと、夢見ているような表情を浮かべており、夕食がはじまり、招かれていた客や、侯爵や芽衣が話しかけても「ああ」しか言わない。

しかも、顔がにやけきっているので、美男子が台無しだ。

芽衣としては、今日の守備はどうだったか、という内容のことを聞かれると思っていたのだが、なんだか拍子ぬけである。一体何があつたのだろうか。気にはなるのだが、なんだか聞きにくい。なぜなら、あまりにも幸せそうにぼんやりしているからだ。

しかし、侯爵のほうはきっちりと聞いてきた。

「それで、初顔合わせはうまくいったのかね？」

芽衣は一瞬、返事に悩んだ。とはいえ、ありのままを報告は出来ない。心苦しくはあつたが、うそをつくしかなかった。

「はい。殿下はまだお仕事が少々残っておいででしたので、殿下のお部屋で、少しお話をいたしました。近いうちにまた来るようにとのことでしたから、早めにお伺いしようかと。とてもお優しくて、お綺麗なかたでした」

笑みをたたえて、穏やかに報告する。

実際には、互いに火花を散らし、激しい舌戦をしながら寝具争奪戦をくりひろげ、モノが飛びかう中を逃げだしてきたのだが。それに、レナードはお優しいかた、というより、さながら地獄からやつ

てきた魔王様のようだった。

「そうかそうか。うまくいったのであれば良い……あとは、早くクレアラベルが見つかりさえすればすべて解決なのだが……なかなか搜索が進まん、まったく、我が娘ながら困ったやつだ」

シュデイルント侯爵、ドウエイン・エジェルシアは、ため息まじりに言って、ワインをすすった。

そのワインとグラスを見て、芽衣は思う。

この世界は驚くほど、あちらの世界と似ている。

いま芽衣のいる食堂も、以前に映画などで見た貴族の館と酷似していた。

白い漆喰で塗り固められた天井には、細やかな草木が彫り込まれており、日中であれば、南側の大きな窓から差し込む陽ざしによって、濃い影を帯び、立体的に浮かび上がる。テーブルは長方形で、その上にかけられた真っ白なテーブルクロスが目眩しい。

卓の真ん中には甘い香りを放つ季節のフルーツと、蜜ろうの燭台が置かれていた。

さらに、料理のなかには、名前が同じものもあった。侯爵がすすっているワインもそうだ。

芽衣が現実逃避の際に眺めていた、外国旅行のパンフレットに載っていたようなパイ料理は、まさに今食べたところである。もちろん、とても美味しかった。

パイ皮の中に、チーズとあらびき肉が詰めこまれており、とろりとしたチーズとパイのサクサク感、あふれる肉汁が溶け合い、たまらない美味しさになっている。

こんな生活をつづけていたら太ってしまいそうだ。

それはともかくとして、芽衣は早々に食事を切り上げることにした。

侯爵に、細かいことをたずねられでもしたら困るからだ。

芽衣は「私も早く見つかるよう願っています」と告げて、部屋へひきとった。

本日の幕を閉じる 2

部屋とは、ここに連れてこられた日に、フランクが使用人に案内させた客間のことである。

芽衣はその部屋をそのまま使わせてもらっていた。

室内には、もともと置いてある家具をのぞけば、ほとんどモノがない。

当然といえば当然だが、芽衣の私物が極端に少ないためだ。持っているものと言えば、最初に着ていた服と、バッグとその中身のみ。

なにより、今はクレアラベルになりきるために、服や小道具は彼女のモノを使わせてもらっている。彼女の持ち物は、なんというか、全体的にかわいらしかった。クレアラベルはこういう趣味なのか、と思っ、かなりうんざりしたことを思い出す。

芽衣は周囲の環境のせいで、自分の部屋だけでもあふれる色柄から逃れたい、と強く思い、モノトーンや無地ばかり選んで身につけてきた。

そのため、気づいたら余計な飾りやロゴがあまり好きではなくなってしまうていた。

クレアラベルの趣味は、芽衣とは、どこまでも対照的だ。

モノも部屋も、本人の性格がそのまま出ている。あの甘ったるい喋り方と思考の持ち主によって選ばれたモノたちは、決して芽衣にはほえまない。

顔は本当に良く似ているのだが、性格も性質もまるで違うのだ、ということをお願い知らされる。

そんなことを思いつつ、芽衣は書きもの机に向かった。

羽根ペンを手にとり、猫足のいすに座ると、引き出しから紙を取りだし「作戦リスト」と書く。シャープペンやボールペンとはまったく勝手の違うこのペンを使えるようになるまでが大変だった。いまだに、使いこなせている、とはいえない。

芽衣は、紙にいくつかインク染みをつくりながら、試してみたい作戦をひとつずつ書きだした。

日本語で書けば、フランクや使用人にも読めないから、安心だ。それに、こうして文字にすることで、考えをまとめられる。

（家族に対しては無駄だったことでも、一応試してみる価値はあるわよね）

そう思いながら、今まで読んだお掃除、お片づけ本の内容を思い出しては書きとめる。

やがて、目が疲れたな、と感じると、メイドを読んでドレスを脱がせてもらい、ろうそくを吹き消すと床についた。暗がりのなかで、昼間見たレナードの顔を思いだす。

（レナード王太子って、部屋と性格はアレだったけど、ものすごく綺麗なひとだったな。芸能人も負けそうなくらい……それに、あの目）

何かを失うことを恐れているように、芽衣には思えた。

芽衣が暴れ牛のごとく、彼にとっての聖域に踏み込んで荒らしまわったことで、奥に封じ込めた感情の揺らぎが、はからずも映し出されてしまっていたような、そんな気がしたのだ。

もしかしたら、あの部屋の惨状となにか関係があるのかもしれない

い。

（原因がわかれば、出来ることも増えるのにな）

そんなことを考えるうち、芽衣は眠りに引き込まれていった。

こうして、レナードとの初顔合わせの日は幕を閉じたのだった。

エルバートの訪問を受ける 1

翌日は、公務があるということで、王宮へは入れないとのことだった。

朝食の席で、ようやく夢の世界から戻ってきたフランクが教えてくれた。

ちなみに、侯爵はまだ眠っており、侯爵夫人のほうは、いつも部屋で食事をするのだそうだ。ここへ来てからというもの、芽衣はほとんど夫人の姿を見ていない。

フランクは、ふしぎな顔をしている芽衣に、細かく説明をしてくれた。

「王族がたのスケジュールは日ごとに細かく決まっていますね、僕たちとお会いになったり、娯楽に興じる時間も、週に三日、公務が終わったあと、ということになっているんだよ」

「そうなんですか。なんだか、学校みたいなんですな」

そう言うのと、芽衣はスコーンを頬張る。さつくりとした食感と、香ばしさが食欲をそそった。向こうではオンタッキー○ライド○キーンでしか食べたことがないが、それよりもずっしりしていて、けっこうお腹にたまる。フランクはそれにベリーのジャムをつけて食べていた。

「言われてみれば似ているな。だけど、王族がたのほうが大変さ。それが一生つづくわけだからね。といっても、まだ王子、王女のうちはそんなに縛られることもないし、まあ、他の国がどうだかまで

は知らないけれどね」

「そういう決まりになっていたんですね……。あ、ところで、今日は何の先生が来ることになっているのでしょうか？」

ここしばらくの習慣で、芽衣は尋ねた。

というのも、王太子に会いに行く以外は、ぼろが出ないように何かしらの先生に来て頂いて、学んでもらうことになっている、と初日に言われたためだ。どうやら、手の空いている人物に片っ端から声をかけているらしく、日々、誰が来るのかさっぱりわからない。そのせいで、朝食の席で訊ねることが習慣化してしまった。

「ああ、ええと」

フランクは言葉に詰まると、控えていた執事呼びつけて、どういう予定になっているのか尋ねた。

執事はすぐに了解し、

「本日は言語学者のパーキンス先生がいらっしゃる予定となっております」

と告げた。フランクは芽衣を見て笑った。

「そういうことだ」

芽衣は納得した。

ようするに、この世界、というか、この国の文字を読み書きできるようになれ、ということなのだ。侯爵令嬢が読み書きもできないようでは、確かに変だ。

「わかりました。ありがとうございます」

フランクと執事に礼を言い、芽衣は思った。英語や中国語を学ぶようなものなのだろうか。内心、かなり不安だった。正直、英語は

あまり得意な分野ではない。

芽衣はとりあえず気をそらそうと、別の話題に切り替えることにした。

「そういえば、昨日私と別れたあと、どなたとお会いになられていたんですか？」

好奇心も手伝って、芽衣はそう訊ねた。気になってはいたのだ。すると、フランクはぎくつ、としてお茶を飲もうとしていた手を止めた。

フランクの頬が赤くなっている。

芽衣は、まずいことを聞いてしまっただろうか、と思いながら、フランクの様子をじっとうかがった。彼はややひっくり返った声で逆に訊ね返してきた。

「ど、どうしてそんなことを聞くんだい？」

「それは、昨夜の晚餐の席で、あまりにぼんやりされていたので、何があったのかな……と。あの、言いにくいようでしたら、聞かなかったことにしますので」

「……に会っていた」

フランクは視線を泳がせながら、ものすごい小声で言った。

芽衣の耳には聞こえなかった。

「あの、何ておっしゃったのですか？」

そう問うと、フランクはさらに顔を赤くして、うつむいたままと言った。

「……王女殿下に、会っていたんだ」

「ああ、王女様に」

答えて、芽衣はフランクの反応を察した。

芽衣が会ったのは兄のレナードのほうではあるが、なにしろ、性格こそアレなものの、彼はとても美しい顔立ちをしていたのだ。あの顔で優しく口説かれたら、たいていの女性は落ちるだろう。そのレナードの妹なのである。彼がこんなふうになってしまうのも、わからなくはない。

「お綺麗だったんでしょね」

「ああ、うん、もちろんさ。君も、王太子殿下に会われたのだからわかると思う。ヴィオンテスの王妃様は、それはもうお美しい方だね、特に、王太子殿下と王女殿下は、よく似ておられるんだ」

うつとりとした表情で、フランクは語った。

「そうなんですか、王妃様ってどんな方なんです？」

「ああ、美しい方だよ」

ぼんやりとしながらフランクが言う。完全に食事の手が止まっている。それどころか、手もとに注意がいなくなっており、テーブルクロスに、お茶がこぼれて、濃い染みをつくっていた。執事の目がなんだか生ぬるい疲れを帯びていることに、芽衣は気づかない訳にはいかなかった。

昨夜もきつとこんなだったのだろう。

それでもだめもとで訊ねてみる。

「陛下とはどのような馴れ初めがあつたのでしょうか？」

「ああ」

「フランク……あの、聞こえてますか？」

「ああ」

だめだ。昨夜とまったく同じ状態になってしまっている。

芽衣はふたたび夢の世界へ旅立ってしまったフランクを見て、そらす話題を間違えてしまった、と思つて、ため息をついた。これでは、もうまともに会話が成立しないだろう。芽衣は仕方なく、彼に詳しい話を聞くことはあきらめ、ひとりさつさと食事を終えると、早々に部屋へと戻つたのだつた。

エルバートの訪問を受ける 2

それから、文机につくと、昨夜書いた「作戦リスト」に目を通す。

芽衣は、レナードの部屋にあった諸々のモノを思い出して考えた。なぜ、彼はあんなにモノまみれになるまでそれらを手放すことが出来なかったのか、ということである。

レナードの場合、庶民によくある、

「ただもつたいないから」

「まだ使えるから」

「買ったとき高かったから」

「あとで高く売れるかもしれないから」

といった、貧乏性な理由からモノを捨てない、という訳ではなさそうなのだ。

それに、そもそもからして望めば何でも手に入る身分なのである。

となると、考えられるのは？ 思い出？ ではないだろうか。

その場合、写真をとってデータにして残しておく、という手もある。だが、ここには写真機じたいが存在していない。だいたい、写真もありすぎるとそれはそれで邪魔だ。きちんと編集して、年代ごとやイベントごとにまとめて、見やすくなっているのだから、データだけでも、写真に焼いたものでもうっとうしいだけだ。

芽衣の家がそうで、何でも記録に残してあるので、紙束が崩れ落ちそうになり、データを焼いたCD、Rがあふれかえっていた。

芽衣は、はっ、として、ゆううつな記憶を振り払うように首を左右に振ると、再び紙に視線を落とした。では、どうすればよいのだろうか。芽衣がしばし考えこんでいると扉がノックされた。

「メイ様、執事のグラントでございます」
「どうぞ」

すぐに返事をする、白髪の混じった壮年の執事が、扉を開けて言った。

「失礼いたします、芽衣様。ホロウェイというお客様がいらしております。王太子殿下の使いの者だとか。応接間にご案内いたしますが、すぐにお会いになれますか？」

一瞬、誰のことを言われたのかわからなかった。だが、王太子の使い、と言われたので、客人の正体はすぐに知れた。エルバートだ。最初は、フランクの言っていたパーキンズ先生かと思ってしまった。

「すぐに会います。ええと、応接間はどこでしたでしょう」
急いで答えて、芽衣は紙をひきだしにしまった。

「南東のお部屋になります。ご案内いたしますよう」

まだ芽衣が館の部屋と位置をすべて覚えていないことを知っている執事は、表情を崩さずにそう言ってくれた。少し恥ずかしい思いをしながら、芽衣は執事にお礼を言って、エルバートの待つ応接間へと案内してもらった。

エジェルシア・ハウスの応接間は白を基調としたとても落ちついた雰囲気の家だ。大きな暖炉があり、その上に、初代シユディラント侯爵が白銀に輝く鎧に身を包んで立っている姿を描いた大きな

油絵が飾られている。その顔はフランクのものとてもよく似ていて、壮健で凛々しかった。

室内にはゆったりと話が出来るように、ソファとどこかのカフェのように小さいテーブルとイスがいくつも置かれている。

執事が扉を開け、中の人物に声をかけた。

芽衣は、すぐにわきにどいた執事にふたたび礼を言ってから室内に入った。

エルバートは、絵の前に立っている。昨日とほとんど変わらない服装だ。

「お待たせしてしまつてすみません」

そう言いながら芽衣が近くへ歩み寄っていくと、エルバートは軽く腰かがめて挨拶をし、ほほえみながら言った。

「いいえ。待たされたと感じるほどには、待たされてはおりませんから」

「それなら良かったです……どうぞ、どこでもお掛けになってください」

芽衣が言うと、エルバートは「では」と言ってから、ソファに腰を下ろした。その対面に芽衣も腰を下ろす。少しして、執事がお茶を持って入ってきた。茶の給仕がすみ、執事が引き取ると待ちかねたようにエルバートが口を開いた。

「まず、昨日は本当にありがとうございました。あの後のことなの

ですが、殿下には散々嫌みや文句を言われたものの、なんとか寝具をお取りかえすることができました、あなた様のおかげです。まあ、取りかえた寝具のほうは捨てざるを得ない状況になっておりました。なにより、殿下はあの寝具でなければ眠れない、と仰いましたけれど、昨夜はよくお休みになれたようでして、今朝はとて不機嫌でしたよ」

言いながら、笑いを噛み殺すように口を押さえる。

芽衣も、つられて笑いだしたくなったが、必死にこらえた。レナードがどのような反応を見せたかが目に浮かぶようだ。この目でそのシーンを見られなかったのは残念だったが、芽衣はおかしいやら嬉しいやら、たまらない気分だった。

「それは、本当に良かったです。ホコリまみれになって怒った甲斐があったというものですね」

「はい。それで、今日私が足を運んだのは次に王宮にいらしていただきたい日が決まったからなのですが、その、もしかしたら、クレアラベル様には非常に失礼なことをお願いすることになりそうなのです」

エルバートは言いにくそうに芽衣から目をそらした。

「失礼なこと、というと？」

「はい、実は、まだ殿下を説得できていないのです」

心から申し訳なさそうにエルバートは言った。芽衣からしてみれば、昨日の今日で説得できるとは思えなかったので、逆に彼の言葉に驚いていた。

「ですが、次のご訪問を先延ばしにすることも避けたいのです。私は、どうしても殿下にクレアラベル様と何度もお会いになって頂きたい、あなたのおかげで、ようやく出口の光が見えたような気がしたのです」

「は、はあ」

そこまで持ち上げて言われるとさすがの芽衣も恥ずかしい。顔から火が出るような気持でエルバートに生返事を返していると、彼はそんな芽衣のようすにも気づかず、さらに言いつのつた。

エルバートの訪問を受ける 3

断られるのを覚悟したような張りつめた表情で、エルバートは言う。

「ですから、ご無礼なのは重々承知のうえで、お願いいたします。侍女の衣装を着て、殿下とお会いいただけないでしょうか？」

なんだそんなことか、と芽衣は思った。

「それでしたら、あの時私のほうからお願いしたこととさして変わりありませんから、構いませんよ。それに、着替えるのは王宮についてから、ということでもよろしいのでしょうか？」

昨日の去り際にエルバートに頼んだこと。そのひとつが、あの汚部屋に入り込んで掃除の出来るような動きやすい服を用意して欲しい、ということだったのだ。だから、侍女の服装ならもってこいなのである。なぜそれが？ご無礼？なことになるのか、芽衣にはすぐにわからなかった。

「あ……はい、もちろんです」

エルバートは目を丸くして芽衣を見ている。その視線の意味を考え、ふと思った。もしかしたら、大貴族の令嬢が使用人の服を着るということはある意味、名誉にかかわる行為なのではないだろうか。しかし、芽衣の本性はエルバートに晒し済み。今さらとりつくる意味がない。

「あなたは本当に変わったお方ですね。こちらとしては大変助かり

ますが……。それでは明後日の昼にお出で頂けるということでよ
しいですね。それと、実はこちらが本題なのですが、今週末に王
宮で夜会が開かれますので、クレアラベル様にはぜひご出席頂きた
いのです。今日はその招待状を持ってまいりました」

そう言つと、エルバートは懷から上等な厚い紙を取り出して芽衣
に渡した。

さつそく開いてみるが、やはり読めない。この世界の、いやこの
国の言葉をすっかり学ばなくてはと嫌な汗をかきつつ、芽衣はほほ
えんで紙を閉じる。後でフランクに読んでもらおう。この感じだと
彼も招待されているはずだ。

芽衣は内心の動揺はひた隠しにしながら、鉄壁の笑みを浮かべて
答えた。

「嬉しいですね、必ず出席させて頂きます」

「ああ、良かった」

すると、エルバートがなぜかやや涙目で心から安堵したような表
情になる。

「もしかしたら、これで私もやっと殿下に立てた誓いから解放され
るかもしれない、そんなふうに思える日が来るなんて……！」

「え？ あの……」

芽衣の鉄壁の笑みに、小さなヒビが入る。彼は目をうるませたま
ま、身を乗り出して招待状を持ったままの芽衣の両手をつかんだ。
何だろう、激しいデジャヴを感じる。

「必ず、必ずいらしてくださいね！ 絶対にお逃げにならないであ
げてください！ 殿下はああ見えても本当に優しく素晴らしい方
なのです。ただ、いろいろなことがおありになり過ぎただけなので
す！」

「は、はあ……」

芽衣は変だな、と思った。エルバートの言葉に、妙に説得力がな
い。昨日はたつぷりとあったはずなのに。

「私、エルバート・ホロウェイ。殿下がご結婚、いいえせめてご婚
約するまでは決して自分も誰かと結ばれたりしないと誓ってこれま
で生きてまいりましたが、このままでは私まで道連れ……あ、いえ、
ごほっ……ごほっ！」

エルバートは何かを言いかけると、慌ててそっぽを向いてわざと
らしい咳をした。芽衣は思わず生ぬるいまなざしで彼をながめ、複
雑な思いのままほえみを浮かべつつける。

「と、とにかく！ 私は殿下に何をしてでも幸せになって頂きたい
のです！ そのためには、やはり一生をとみにしてくれる伴侶が必
要不可欠だと思うのです……！」

どう返事をすれば良いのだろうか。芽衣は悩んだ。

しかし、どうしてこう誰もかれもが芽衣に「逃げないでくれ」と
頼んでくるのか。今まで一度たりともそんなそぶりを見せたことす
らないし、口に出したこともない。だいたい、まだレナード王太子
とは一度しか会っていないのである。もう会いたくない、と芽衣が
感じるような決定的なことが起こった訳でもない。ようするに、今

までがよほどひどかったのだろうな、と芽衣は結論付けた。

「はっ、失礼。つい取り乱してしまいました。今、私が言ったこと全てが、心からの言葉です」

それに関してはすぐに信じられた。特に「このままでは私も道連れ」の辺りは、血の出るような叫びだったのだ。なにしろ、エルバートの整った理知的な顔が、必死の形相に歪んだのを見てしまったのだから。芽衣は心から彼に同情の念を抱いた。

ついでに、良心もちくりと痛む。

いずれはクレアラベルも連れ戻される日が来る。そのときが来たら、芽衣は舞台から去らなければならない立場だ。けれども、エルバートはあの大魔王のようなレナードを恐れなかった唯一の令嬢として、芽衣に希望を見いだしている。

しかし、彼の希望が叶えられることはない。なにしろ、身分に差があり過ぎる。だからせめて、このうそのおわびにやれることはやるう、と芽衣はこっそりと心の中で誓った。

まあ、半分くらいは自分の憂さ晴らし的な理由もあるけれども。

芽衣は笑顔を浮かべたまま言った。

エルバートの訪問を受ける 4

「あなたの言葉を疑ってなどおりませんわ」

芽衣の言葉に、エルバートは苦笑した。

「申し訳ありません。その、本音を言わせていただくと、今回もだめだろうと諦めていたのです。どうせまた、国内からお妃候補のご令嬢がひとり消えるだけだろう、と。もうヴィオンテス王国内では、殿下とお会いしていないご令嬢はほとんど残っていないのです」

不満たつぷりに、しかも悲しげに言う。誰も彼もが、レナードと正面から向き合うことすらしないようだ。あの大量のモノたちと見た目、うわさだけで判断し、逃げ出していく彼女たちに対するエルバートのやるせない憤りが、その声から感じられた。

「しかも、残っておられるご令嬢がたも、その大半が殿下を恐れて会うことすら嫌だと言いつける始末。正直、気が早いとお思いになれるかもしれませんが、私はあなた様に、殿下のお妃になっていたきたいと心から思っているのですよ」

芽衣は、黙ってそれを聞いた。

「あなた様しかいないから、ではなく、あなたが最もふさわしいと私は思います。もちろん、あなたのお心次第ですが……私は！」

「待つて、それ以上は仰らないでください。今、お返事をする事は出来ないのですから」

放っておけば芽衣がうなずくまで延々と懇願をつづけそうだと判

断して、口をはさんだ。

挑戦できることを頼まれるのは構わないのだが、不可能な願いをされてもうなずくことなど出来ない。芽衣はうそをつくのは正直好きではない。今だって、好きでうそをついているわけではないのだ。これ以上は増やしたくない。

「申し訳ありません」

「いいえ！ 殿下のことを大切にお思いになられているからこそその言葉なのですから、謝ることなんてありませんよ。私も、今はまだ何のお返事も差し上げられませんが、さしあたってはあのお部屋の改善が大切です。私でお力になれることがあれば、なんでもする、とお約束いたします」

そうだとも。まずはあの汚部屋を何とかせねばならない。

「……ありがとうございます。それでは、また明後日にお会いできることを楽しみにして、本日はこれでお暇させていただきます」

彼は少しだけ残念そうな顔で立ち上がった。芽衣も一緒に立ちあがる。それから、エントランス・ホールまでついていき、彼が乗ってきた馬車に乗り込み、最後に挨拶して去っていくのを見送ると、芽衣は大きく息をついた。

「これは、思ったより大変かもね」

肉体よりも、精神にけつこうな負担がくる。芽衣は一瞬、早くクレアベルが見つかるといいな、と思ったが、すぐにあまり早くても困るか、と思い直した。せめてあの汚部屋が普通部屋になるくら

い片づくまでは見つかつて欲しくない。

あの惨状を知りながら手出しが出来ない立場に置かれるなんて、それ以上に精神衛生上大変よろしくないことがあるだろうか。

芽衣は、しばらく考えごとにふけりながらエントランス・ホールに立っていたが、やがて小声で気合いを入れてから部屋へと戻った。やがて午後になると、神経質そうな三十代くらいの男性、パーキンズ氏が訪れて、言葉の勉強が始まり、芽衣の頭は他のことを考える余裕がなくなってしまった。

その夜。

芽衣は夕食の後で書斎を訪れた。執事のグラントにフランクはどこにいるかと尋ねたら、書斎に在るとの返事が返ってきたからだ。それからすぐに書斎へ向かい、扉をノックすると、中から返事が返ってきたので、すぐに中に入る。

フランクはワインをお供に、くつろいで読書をしていた。ランプの強めな明かりに照らされて、金の髪が燃えるように輝いている。横顔には濃い陰影ができており、コントラストが美しい。なんて絵になる光景なんだろうと思いつながら、芽衣はさっそく本題を切りだす。

「あの、今日昼間に訪ねてきた殿下の使いのホロウェイさんから、これを頂いたんですけど、何が書いてあるのかがわからなくて」

「招待状？」

エルバートに渡された招待状を見せると、フランクは驚いて本を閉じて、芽衣の手から招待状を受け取ると、開いてさっと目を通す。

「エジェルシア家全員が招待されてるね。それにしても、君は一体何をしたんだい？　これは、よほど王家とつながりがないと招かれない舞踏会だよ。貴族でも、ごく一部しか招かれない。かくいう我が侯爵家が招かれるのはこれが初めてだ」

「え、それ、そんなにすごいものなんですか？」

芽衣がびつくりして問うと、フランクは一輪の薔薇でも手にしているみたいに招待状を持って立ち上がり、言った。一瞬、何の演目が始まるんだと誤解してしまうような、芝居じみた動きだ。正直、フランクのこういうところが心臓に悪い。

「そうだよ！　ここに招かれるということは、貴族にとっては名誉だ。軍功をあげるか、国に功のある者、また親族関係しか招かれない。ここには、他国の王族も来るんだよ。ご令嬢ならそこでどこかの王子様の目にとまるかもしれないんだ」

「はあ、なるほど」

ようするに、貴族の社交パーティの上級版みたいなものか、と芽衣は思った。

「これは父上にも早くお教えしなければ、ちよつと行ってくるけど、君はどうする？」

「私は遠慮しておきます。もう眠いですし、予習もしたいので」

芽衣がそう言うと、フランクは「そうか」とうなずいて退室していった。

「正直、よくわからなかったな……結局読み上げてくれなかったし」

小さくため息をついて不満を口にとすると、芽衣もすぐに書斎を出る。

今日は頭を使うことばかりで疲れた。明日もパーキンス氏が来ることになっているから、連日頭が疲れそうだ。どうせなら、文字だけでなく乗馬も習いたかったな、そうすれば時々気晴らしに出かけられるのに、と思いながら、芽衣は部屋に引き取ったのだった。

王太子に会う、二回目 1

空は爽やかに晴れ渡り、冷たい風のなかにもあたたかさがまじって、もうすぐ春が来るのだと深く実感できるような気候だった。

芽衣は初日と同じようにフランクにともなわれて王宮へと向かった。

今日のドレスは淡い黄色で、髪はゆるやかにまとめている。

正直、あれからぶっ通しで行われた言葉の勉強で、発狂しそうな気分になっていた芽衣は、外出出来ることが嬉しくてたまらなかった。部屋に缶詰状態になり、英語と似た形の文字を、まだ使い慣れない羽根ペンで延々と書いたり読んだり。

しまいには顔が般若になってしまい、パーキンス氏を怯えさせてしまう有りさまだった。

やがて馬車はどこおりなく宮殿にたどりつき、前回と同じように前庭を歩いていく。左右対称に作られているこの庭に春がきたら、さぞ綺麗なんだろうなと思いつながら歩いていくが、まだほんの三日前に来たばかりなので、何の変化も見られない。

ただし、前回と違っていたのは、すでにエルバートが見知らぬ侍女ふたりをともない、外に立って芽衣を待っていたことだった。

彼らは芽衣とフランクの姿を確認すると、すぐに歩み寄ってきて挨拶をする。

「お待ち申し上げておりました、フランク様、クレアラベル様。殿下方はすでにお待ちでございます」

「やあ、ホロウェイ。そういうえば、どうしてこの間は僕に会いもせずに帰ってしまったんだい？」

フランクは少し残念そうに訊ねる。

「申し訳ありませんでした。ご存じのとおり、私はほぼこの身ひとつでレナード殿下の雑務をこなしておりますので、恐ろしいほど忙しいのです」

エルバートは困ったように笑った。

芽衣は、まだ知り合って日の浅いエルバートについては、ほとんど何も知らない。けれど、このようすと、フランクとエルバートは知り合いのようだ。後で、彼がどういう人物なのかをそれとなく聞いてみようと思いに書きとめ、芽衣はエルバートと向きあう。

すると、エルバートは得心したようによどみなく笑顔で言った。

「本日、王女殿下は南側の離宮でご友人たちとお茶会を開いておいででございます。こちらの侍女がそちらへご案内申し上げますので、フランク様はどうぞそちらへ。クレアラベル様は、私がレナード殿下のもとへご案内差し上げます」

フランクはそう告げたエルバートを、少々同情をこめた目で見てから「わかった」とうなずき、侍女に案内されて歩き去って行った。

その背を見送ってから、芽衣は改めてエルバートにきちんと礼を

して、問う。

「準備はできていますか？」

「はい、もちろんです。ではこちらへどうぞ……ああ、その前に紹介しておきますね。これは私の妹で、侍女をしているアネリです」

「は、初めましてクレアラベル様。アネリと申します。今回、身の回りのお世話を仰せつかりましたことを光栄に思っています、がんばりますので、よろしくお願いいたします！」

いったいエルバートは彼女に何を吹き込んだのだろう。光栄なんて言われると背中がむずがゆくなる。女王様じゃないんだから、と芽衣は内心想ったが、顔には出さない。いや、出せない。

芽衣はほほえみだけは崩すまいと努力した。

勢い込んで言った少女は、輝く目で芽衣を見つめている。年の頃は、芽衣とさほど違いはないだろう。愛らしさの中にも、活発さがあり、それが魅力となっている。容姿はエルバートと似ている部分もあれば、まるで違ふところもある。茶色い髪に、大きなはしばみ色の丸い瞳、鼻の頭にはわずかにそばかすが散っている。

だが、天真爛漫なその少女が、微かに震えていることに芽衣は気づいた。

これはやはり、レナード王太子を恐れての反応なのだろうか。

芽衣は、そつと手を伸ばして、自分より少し背の低いアネリの手を握った。

「そんなに緊張しなくても大丈夫よ。今日は世話をかけるけど、よろしくね、アネリ」

優しい声で言って、にっこりと笑う。すると、アネリは驚いたように目を丸くしていたが、やがてどう言うわけかうつとりした表情になると「はい」と返事をしてくれた。芽衣はほっとしたものの、何かが激しく間違っている気もしないではなかった。

「おやおや、我が妹もすっかりあなたのとりこになってしまいたね。それでは行きましょうか。まずは着替えのできる部屋へご案内いたします」

苦笑気味にエルバートは言い、歩きだした。

芽衣はそのすぐあとにつづく。後ろにはアネリが嬉しそうについてくる。

芽衣は、二度目となる宮殿内部の景色を黙って見つめながら歩いた。宮殿というのは、権威の象徴でもあるので、その威光や財力を見せつけるようなものが多い。芽衣の暮らす現代でも、そういった意味合いから豪邸に暮らすひとは多いのだ。

といっても、そこはさすがに国の顔でもあり、多数の一流芸術家がたずさわっていると見えて、嫌らしさが見えないところはさすがだと思う。

といっても、金や銀や、多数の色を使ったきらびやかさはやっぱり趣味には合わないな、と結局同じ感想を抱いてしまう。そんなことを思いながら、芽衣は妖気漂う王太子の執務室兼自室へと歩を進

めた。

王太子に会う、二回目 2

やがて、レナードの執務室の入り口が見えそうな場所まで来ると、エルバートが立ち止まった。そのまま、近くの部屋の扉を開けると、中に入る。

芽衣も続いて中に入った。彼は入ってすぐに振り向くと言った。

「隣の部屋に侍女の服とお申しつけになられた用具類を用意させておきました。私はここでお待ち申し上げておりますので、どうぞ、お着替えになられてください」

「わかりました。出来るだけ急ぎますね」

芽衣は答えて、アネリとともに隣室に足を踏み入れる。

そこには、アネリが着ている灰色をした毛織のワンピースに、エプロンをつけたような服が寝台の上に広げて置かれていた。足もとには、芽衣がエルバートに頼んだ掃除用具が所狭しと並べられている。

バケツにぞうきん、羽ぼうき等々。その中に、見たことのない物体を見つけて、芽衣は首をかしげた。これも掃除に使う道具なのだろうか。着替えの準備をしていたアネリに訊ねてみる。

「あの、これも掃除用具なの？」

「ああ、クレアラベル様はご存じないですね。それも掃除に使う道具ですよ」

芽衣はアネリの答えに「へえ」と言いながら、すいか大の物体に細長い棒をぶっ刺したような「それ」を手取る。思っていたより軽い。同じくらいの大きさの磁器の花瓶くらい。見た目は完全にフラスコを巨大化したような感じだ。陶器のようになめらかで黒い表面をよく見ると、口もとのところに、蔦がからまったような文字で、小さく何か書いてある。

妙だな、と芽衣は思った。

昨日までこの国の文字ばかり見てきたが、これはこの国で常用されている文字とも、隣国で用いられている文字とも異なる。

「それが発動するための魔術文字になります。そこをなでると動きますよ。なでる場所によって動き方が違うので、もしもお使いになられるようでしたら、あとで使い方をお教えいたしますね」

「……魔術文字」

つぶやいて、芽衣はこの世界へ連れてこられたときのことを思い出した。あの魔術師の青年は、虹色に輝く水晶を使って、芽衣をこちらへ引きずり込んだ。それを見て、自分のいた世界とは違うことを理解したのである。

それから色々とありすぎて、そのことについて思いをはせる余裕がなかったが、どうやら本気でこの世界には「魔術」なるものがあるらしい。そんなオーリー・オッターみたいなことがあるのだろうか、と思いつつ、後できちんと誰かに質問してみなければ、と芽衣は心に刻んだ。

とりあえず、ものすごく気になるが、なぞの道具はもとの場所へもどし、芽衣はアネリの手を借りて、ごわごわする毛織の服に着がえる。ドレスは部屋に残し、髪の毛の後頭部でお団子にまとめると扉を開けて、外で待っていたエルバートに声をかけた。

「着がえ終わりました。殿下のところへ参りましょう」

「はい。ああ、そのお姿も魅力的ですよ」

「ありがとう。でも、お世辞は必要ありませんわ。片づけたり、掃除したりするのに魅力なんていりませんし」

芽衣は苦笑してそう返した。すると、エルバートは意外そうな顔で言う。

「いえ、本心から言ったのですが。それで……その、クレアラベル様はなぜそれを？」

エルバートは、芽衣が両手で抱えているものを見て訊ねてくる。すると、芽衣の後ろからアネリが顔を出して、代わりに説明してくれた。

「どうしてもそれをお使いになつてみたいんですつて。重いので私がつつと言ったのだけど、色々いじって使い方を覚えたいというの。ふしぎな方ね、クレアラベル様つて」

エルバートと似たようなことを言うアネリ。芽衣はなぜそこまで自分の行動がふしぎがられるのだろうと思いつながら言う。

「だって、慣れないうちはたくさん触れて、色々やってみるのが

早く覚えるこつでしょう?」

なぞの道具をためつすがめつする。面白そうなので、早く使ってみたいのだ。他にも、見たことのないなぞの道具はたくさんあったのだが、とにかく今はこれが一番気になる。

「それは確かにそうなのですが、まあいいでしょう。ではアネリ、他の用具類は私たちが持てるだけ持ちましょう。運んで来て下さい」

エルバートはおかしそうに芽衣を見てそう言った。

アネリは「はい」と返事をして部屋に戻ると、さまざまな用具を持って戻ってくる。何度か部屋と廊下を往復して、両手に抱えられるだけのものを持ちだし、それぞれが手に道具を持つと、誰からともなく目配せしあう。

互いに、ここからが本番だぞ、という思いを目線にこめる。

おそらく、レナード王太子はすぐにも芽衣やエルバート、アネリを追い出しにかかるだろう。あの高圧的な態度で迫ってくるはずだし、芽衣は前回と違って最初からひとりではない。頼もしい仲間も得たのだ。前回はシーツなどの寝具しか触れなかったが、今回はもう少し進みたい。

出来ればそれとなく、レナードがごみをためるようになったのはなぜなのかについて、探りをいれてみたい。あくまでも出来れば、ではあるが。

芽衣は決意を固めて言った。

「それでは、殿下のもとへまいりますよう」

王太子に会う、二回目 3

王太子レナードの執務室兼自室は、相変わらず混沌としていた。いや、よくよく観察してみれば、むしろモノが二、三点増えているような気さえする。

こちらを踏み入らせまいとする超強力な結界でも張ってあるかのようを感じ、芽衣は奥歯を噛みしめた。そのすぐ後ろでは、アネリが小刻みに震えている。

芽衣は顔だけ後ろに向けてアネリと目を合わせると、大丈夫だといふふうにならずいてみせた。すると、アネリはほんの少しだけ笑顔を見せてくれる。だが、無理をしているのはあきらかだ。

「それでは、まず私が行って殿下の足止めを行います。クレアラベル様とアネリは、その間に必要なことをなさって下さい。本当は、きちんとした形でお会いいただきたかったのですが、力が及ばず、このような形でしか場を設けられなかったことをお許しく下さい」

「いいえ、本来なら、もう二度と宮殿へ入ることを許されない身なのです。機会を与えて下さっただけでもありがたいと思っていますわ」

口惜しげなエルバートに向け、芽衣は真っ直ぐに彼の顔を見て言った。

エルバートは顔だけこちらに振り向かせると、感激したような顔で芽衣を見る。

そこまで感動するようなことは言っていないはずなのだが……と内心困惑した。彼の期待の重さに、両肩に石でも載せられたような気分になりつつ、それでも明るい顔で笑みを返す。

「さ、さあ、突入しましょう！」

いつまでも称賛の目で見られるのは気まずいにも程がある。芽衣は思わずエルバートを急かした。同時に、たかが部屋の掃除でここまで盛り上がるのも正直なんなんだろうと考える。

エルバートは、芽衣の言葉に表情を引き締め、うなずいた。それから、前方に敵がいるかのように睨みつけ、息を整えてから、執務室へと入って行く。

「殿下、本日の決済書類を持ってまいりました。量が多いので、侍女にも持たせております。失礼してもよろしいでしょうか」

「ああ。だが、置いたらさっさと退室しろ」

不機嫌そうなレナード王太子の声がした。耳にすると、緊張感が高まる。芽衣は、胸に手を当てて深呼吸した。さあ、戦いの始まりだ。エルバートに手招かれ、芽衣は毅然と顔を上げて歩きだす。

が、アネリがついて来ない。振り返って彼女の顔色を見ると、ひどく青いのがわかった。芽衣は息を突くと、言った。無理をさせたらかわいそうだ。

「あなたは来なくても大丈夫よ。ここで掃除用具を見ていてくれれば十分よ。また後で、着替えを手伝ってね」

「あ、あの、も、申し訳、ありません……ん」

恐怖で顔の引きつったアネリに向け、芽衣はゆるやかに首を横に振る。「あなたは悪くないわ」そう言うと、芽衣はひとり、とりあえずごみを入れるための麻袋と羽ボウキを持って歩きだす。

あの妙な物体を使ってみたかったが、まずはモノをどかさないとにはどうしようもない。いつか使える日が来ることを祈ろう。

やがて、目の前にゆううつになる光景が広がる。

つぼだの棒きれだの紙くずだの、数え切れないごみにしか見えないう物体。せめてもの救いは、家とは異なり、生ごみ系がないことくらいだ。持っているごみ袋に突っ込みたいのをがまんして進む。まずは、部屋の主に挨拶するのが先だ。

スカートの丈が短いので、前回よりも楽にモノを避けられる。やがて部屋の入口まで辿りつくと、正面の机で頭に手をやり、髪をつかんで険しい顔をしているレナード王太子の前に立った。彼は紙に何かを書きつけ、判を押しては悪態をついている。

「そこに置いて早々に出て行け、ここにあるものには触るな」

「いいえ。出て行きません。ごきげんよう殿下。またお会いできて嬉しいですね」

芽衣はレナード王太子を見下ろしてほえんだ。彼の手が止まり、ゆっくりと顔が上を向く。端正な顔に浮かんでいた険しい表情が、みるみる不快の色へと変化していく。それを眺めながらも、芽衣は

ほほえみを決して消さない。

「……どういうことだ、エルバート。こいつは二度と宮殿に入れるなど言っただけだ」

「はい、ですから何度もお返ししました。それは承服しかねます、と」

エルバートの言葉に、レナード王太子は椅子から荒々しく立ち上がると怒鳴った。

「さっさと出て行け！　いいか、また俺のモノに無断で触れてみる、ただでは済まないぞ」

「お断りします。これは私にとっても生きるか死ぬかの戦いなんです！　何と言われようと掃除をしてから帰ります！」

宣言するなり、芽衣は袋を派手に広げて、足もとのモノを拾い始めた。レナード王太子は舌打ちし、すぐにやめさせようとこちらへ来るが、その前にエルバートが立ち上がる。

「クレアラベル様の邪魔はさせませんよ！　今回ばかりは、本気で殿下に逆らわせて頂きます！」

「貴様、そこをどけ！　よくも逆らうだなどと言えたな……早々に荷物をまとめて出て行け、お前もクビだ！」

狼がうなり声をあげているような感じがした。芽衣は皆が恐れる理由が少しずつわかってきた。怒ると本当に怖いのだ。だが、エルバートは臆せず言い放つ。

「何をお言いになるかと思えば、私をクビにして困るのは殿下の方なのではありませんか？ あなたのもとに残った側近は私だけなのですよ。皆、クビにしておしまいになられたでしょう？」

至って真面目な顔で、エルバートは隙をうかがうレナード王太子に問う。

「私をクビにするのは構いませんが、ではこれから誰があなたを毎朝起こし、支度を整え、仕事のための雑事を行うのですか。そのような脅し文句、私には効果ありませんよ。なにより、私は陛下から直々に辞めないで欲しいと頼まれているのですから」

エルバートはよく通る声で断言した。芽衣はそちらの様子をうかがいつつ、さすが最後の臣下だけはある、と心から関心しつつ、ひたすらにごみ拾いをつづけた。

王太子に会う、二回目 4

怒り狂うレナード王太子をちらり、と見ながら芽衣は思う。皆、彼の怒りの激しさに恐れをなして逃げだして行ってしまったのだろう。それは、最初にここを訪れたときの侍女の反応や、アネリを見ていて感じたことだった。

だが、エルバートには恐れは微塵もない。最強の味方だ。芽衣はそれを喜びつつ、やはりごみ拾いをつづける。拾っても拾ってもまだ拾いきれない。

しかも、あきらかにごみ以外のなにものでもないものしか拾っていないのに、尽きないのだ。この袋いっぱい拾えば、少しは片づくだろうと思っていたが甘かった。とにかく、今日はこの袋いっぱいにごみを詰める。そう決めて、どんどん放りこんでいく。

「くそ！ どけっ……それに触るな！」

言いながら、レナード王太子は手近なものをつかんで投げてきた。芽衣はその気配に気づくと、身をかわして避ける。家族もよく、ごみを集めていると激しく怒り狂いつて吠えながら同じことをしてきたので、慣れているのだ。

それを見たレナード王太子は、ますますむきになってモノを投げつけてくる。エルバートが途中でキャッチして数を減らしてくれているが、そんなことなどものともせずに投げてくるので、うちいくつかは、芽衣の背中や肩、たまに頭に当たった。

芽衣は気にせずにごみを集め続ける。ふしぎなことに、レナード王子は、当たってもたいして痛くない、軽いものしか投げてこない。家族の場合はサッカーボールやティッシュの箱、ひどいときには陶器の花瓶まで投げてきたこともある。

さすがにその時は全力で避けてものすごく怒ったのだが。

ごみを拾っては袋に突っ込みながら、芽衣はふと思った。

クレアラベルやフランクに聞かされた王子のうわさ話には、裏があるのではないだろうか。戦争で人をたくさん、しかも自らの手で殺した冷血王子。それが世間の彼の印象らしいのだが、こうして相對してみた彼は、ここまで無礼を働きまくっている芽衣を殺そうとは思わない。

それが、この部屋の惨状と関係している可能性は高いように感じる。

そんなことを考えつつ、ごみを拾っていると、芽衣の周辺、半径三十センチくらいが片づき、ようやく床が見えてきた。

その中から、今まで埋もれて見えなくなっていた、きれいな螺鈿細工の小箱が出てくる。それは長方形の木箱で、木目の美しい材木を使い、尾羽の長い鳥の形を螺鈿で象眼を施した一品で、ふたを開けると、中から大量のカビた羽根ペンが出てきた。

強烈な匂いと飛び散ったカビの胞子に、芽衣はこらえきれずに咳き込む。

箱自体は強いアルコールで拭いて日干しすれば使えるようになる

かもしれないが、中身は完全にダメになっている。これは捨てるしかない、そう結論し、芽衣は中身を麻袋にあげようとした。

「止める！ それを捨てるな！」

ひと際大きな、どこか悲鳴にも聞こえるレナード王太子の怒声があった。声にただならぬものを感じ、芽衣は作業の手を止めて、驚きとともに振り返ろうとした。が、そのとたんに突き飛ばされる。

「きゃあっ！」

バランスを崩した芽衣は、そのまま横倒しにゴミ山の中へ倒れ込んだ。同時に、左手に小さな痛みが走る。慌てたエルバートがモノの山にぶつかりながら駆けよってきて、すぐに助け起こしてくれた。

「ありがとう……痛っ！」

礼を言った芽衣は、思わず顔をしかめた。見ると、左のてのひらが中指から親指のつけねくらいまでざっくりと切れてしまっている。少し時間がたつと、傷口がじんじんと熱を持って、痛みの信号を脳に送りはじめた。

「クレアラベル様……お怪我を、早く手当てしなければ」

「ええ、そうね」

言って、芽衣はため息をついた。まだ大して掃除が進んでいないのに。今度からは手袋をするべきね、と思って顔を上げると、凍りついたようにこちらを見ているレナード王太子と目が合う。

彼は小箱を大事そうに抱えながら、ショックを受けたような顔をしていた。

「……怪我を、したのか？」

「ちょっと切ってしまっただけです。大した怪我ではありません」

芽衣は簡潔に言っ、立ち上がった。エルバートは、自身の手巾を取り出して、一時的な応急処置をしてくれている。手に白い布が巻かれ、それに血がにじむ様子を眺めたあと、芽衣は顔を強張らせているレナード王太子を見て、次いで彼が大事そうに抱えている小箱を見て、問うた。

「それ、とても大切なものですね」

「あ、ああ。これは俺の宝だ……捨てられては困る」

それまでの覇気はどこへ消えたのか、ひどく悄然とした様子でレナード王太子は言った。力を込めて持っているのか、指先が白くなっている。

芽衣はそれを見て目を細めると、微かに苛立ちの混じった声で言った。

王太子に会う、二回目、5

「それならなぜ、もっと大切に保管なさらないのです？ その中身の羽根ペン、すべてカビが生えているではありませんか。そのまま放置すれば崩れ去り、あとかたもなくなってしまいますよ」

芽衣が言うと、レナード王太子は顔をそむけて険しい顔をさらに歪めた。どこか、思いたしたくないことを思いたしているような顔だ、と芽衣は思った。しばらくの間、部屋に静寂が満ちる。芽衣はレナードの方から何か言うのを待ったが、彼は口を貝のように閉じたまま、一向に何も言わない。

先に声をあげたのはエルバートの方だった。

「……クレアラベル様、今、羽根ペンと仰いませんでしたか？」

「え、はい。あの箱の中身は全て羽根ペンでした。皆古ぼけて、ホコリとカビでかなりひどいことになっていましたけれど」

エルバートの問いに、芽衣は首をかしげつつ答えた。その答えに、エルバートはレナード王太子の顔を見て、やや戸惑ったように訊ねた。

「殿下……もしや、まだあのことを引きずられておいでなのですか？」

レナード王太子は、その問いに叫ぶように言った。

「黙れ、それ以上何も言うな！」

かなり大きな声。芽衣は驚いて目を見開く。レナード王太子は深呼吸をした。深く、息を吸っては、長く吐く。それからすぐに執務机に戻り、箱を置いてから、芽衣とエルバートの方へと歩いてくる。

彼は芽衣の前までやってくると、眉間に深いしわを寄せ、口をへの字に曲げた状態で見下ろしてくる。何を考えているのか、その表情から読むことはできなかった。

レナード王太子は、かなりゆうつつそうな表情のまま、おもむろに手を伸ばして芽衣の左手をとった。エルバートが巻いてくれた布には、うつすらとだが血がにじんでいる。

芽衣はしばらく王太子の顔を見てから、持ち上げられた手に視線を移す。手袋ははめられておらず、素手だ。もつと優雅な、細くて長い指や、なめらかな皮膚を想像していたが、その予想は見事に裏切られた。彼の手は、ごつごつと節くれだち、まめや切り傷で荒れていた。

手を取ったまま何も言わず、しばらくその場には沈黙がとどまる。芽衣は顔をあげてレナード王太子の表情をうかがうが、やはり、そこからは何も読みとれない。

仕方なく、よく観察する。憎たらしいほど綺麗な顔。いつも無表情が無愛想なため、冷たい印象ばかりを抱いてしまいがちだが、これで少しでも笑えば、全く印象が変わるだろう。もったいないな、と芽衣は心から思った。

「……傷つけるつもりはなかった。だが、もう本当にこういうこと

はやめてくれないか。俺に会うことを義務だと思っているのなら、そんなことはないんだ」

ようやく絞り出されるようにして紡がれた言葉は、穏やかだったが、やや悲しみに沈んでいた。彼がこんなふうに話すところは初めて見た。その痛みに耐えているような目に、胸の奥がやわらかく痛む。

「私は、義務だからまたここに来たわけではありません。ただ、知って欲しかったのです」

芽衣は、声が震えないように気をつけながら言う。すると、レナード王太子は怪訝な顔をした。

「人間にとって、住まいはとても大切な場所なのです。心と体を休めて、うそをついたり、飾らなくていい唯一の場所です。おそらく殿下にとってはそれがこの部屋のはず……ですが、今この場所はその役割を果たせる状態ではない」

いったん言葉を切り、芽衣はレナードが執務机に置いた箱を見る。

「あの箱の中身、殿下にとっての思い出の品なのでしょう？ そういった品も、人の心を癒すのに必要なものです。けれど、あれではモノも殿下も、埋もれて嫌われて朽ちていくだけです。ちゃんと管理して、手を入れてあげてこそ、モノは意味を持つようになる」

芽衣は改めてレナード王太子を真っ直ぐに見て、一番伝えたかったことを口にした。

「きちんと掃除され、整理整頓された状態の部屋が、どれほど人に

とって救いになるのか、私はどうしても殿下にそれを知って頂きたかったのです……義務で来たものではありません」

それは、王太子に向けた言葉であると同時に、家族に言いたかったことでもあった。結局、家族は芽衣の話を聞いてはくれず、ただやるせない怒りをぶつけ合うばかりで、問題の根本に踏みいることも出来なかった。

だが、今、レナード王太子は、目の前で静かに芽衣の声に耳を傾けてくれている。

直感で思う。この部屋も、彼の心の問題も、いずれ必ずきれいに解決するだろう、と。

「お願いです。少しずつで良いのです、この部屋をきれいにして行きませんか？ 殿下が捨てるなどいうものは決して捨てません。ただ、埃を払って汚れを拭いて、整頓することを、どうかお許し下さいませんか？」

懇願するように芽衣は言った。レナード王太子は黙ったままで、何も答えない。エルバートは、レナード王太子の様子をうかがいながら、口を開くのを待っている。

やがて、レナード王太子の唇がかすかに開き、声が発せられた。

「わかった。だが、その言葉は守れ。でなければ、二度と宮殿に足を踏み入れさせない」

苦しげに絞り出された言葉。芽衣は、すぐに反応できなかったが、彼が言ったことの意味を理解すると、驚きつつも、笑顔になる。思

わず、エルバートに顔を向けると、彼もまた、満面の笑顔でうなずきかえしてくれた。

芽衣は顔をレナード王太子に戻し、言う。

「ありがとうございます、必ず、必ずお守りいたします！」

くせで、頭を下げてしまった。芽衣はそれに気づかずに、言い知れぬ達成感に心が温かくなった。

ちゃんと言葉が通じた。ただそれだけのことが、無性に嬉しい。きちんと話を聞いてもらえるということのありがたさを噛みしめる。

「ふん。いいからさっさと医師に診てもらって来い。エルバート、彼女を俺の主治医のところへ連れて行け……それから、次に空いている日を調べて教えておけ。俺は、残りの仕事に戻る」

レナード王太子はぶつきら棒に言い捨てて、執務机にもどった。芽衣は、思わずその姿を追ってしまう。どこか恥ずかしそうな顔に、つい見惚れていたのだ。

冷たい彫像に命が吹き込まれたように思えたのである。

「さあ、クレアラベル様、医務室へ参りましょう」

「え、はい。それでは殿下、失礼いたします！」

「ああ」

素っ気ないが、ちゃんと返事が返ってきた。

芽衣は口もとをほころばせ、エルバートにつづいて部屋を後にする。その後、待っていたアネリに事情を説明し、医務室へ向かう。その途中、芽衣はエルバートから感謝の言葉を告げられた。

「あの殿下からついに譲歩を引き出すことができるとは！ 本当に、どれほど感謝してもしきれません。この出会いを、神に感謝しなくてはなりませんね。本当に良かった」

芽衣はすぐにそんなことはない、大したことはしていないと否定したもの、アネリまで一緒になって褒めたたえはじめ、思わず閉口した。

しかも、否定すればするほど余計に賛辞を言われてしまうので、黙るのが賢明と判断したのだ。

だが、それでもエルバートは口を開けばうわごとのように称賛をくり返し、芽衣は思わず心の中で、早く医務室について欲しいと思った。

なんでこんなに広いのよ、と宮殿の広大さを呪いつつ、芽衣はどうしようもない恥ずかしさに耐えるしかなかったのだった。

王家の一日 1

それは必然からしたることだった。

恨みや怒りがなかったとは言わない。それでも、後悔は一切ない。だが、あれ以来すべてが変わってしまったことも、また事実だった。

荒れ狂う海。飛び散る血。

目の前で、自分を生かす、ただそのためだけに、言葉を交わし、将来のためにもに戦い、働いてきた臣下や部下たちが次々とその命を失っていく。何も出来ずに、唇を噛みちぎり、ただ怒りと恨みをつのらせ、悲しみに身を焼いたあの日。気が狂いそうなか、ただ決して彼らの死を無駄にはしないという思いだけが、正気を支えていた。

あの光景を、レナードは一生忘れることはないだろう。

「……っ」

目を開けると、見慣れた天井が目に入る。そうだ、ここは戦場ではなかった。体を横にし、積まれたモノの山を見て、ふと自嘲の思いに捕らわれる。

その一角。ほんの一部だけ片づいた場所に目をやると、かさぶたを無理にはがしたような痛みと、奇妙な清々しさを同時に感じた。

レナードは鼻を鳴らし、その感覚を振り払うように頭を振ると、身支度を整えるために寝台の外へ出た。室内履きをはき、窓から外

を見やる。視界には曇天が広がっている。あとで雨になるかもしれない。このヴィオンテス王国の春は雨が多く、晴れ間がのぞくことを神が笑うというくらいだ。

ぼんやりと、外を見ながら佇む。静かだった。レナードは、しばらくの間その静けさを楽しんだ。苛立ちに満ちた心が、ゆつくりと凪いでいくような感覚がある。耳をすませ、風の音を聞く。すると、小さな足音が聞こえて、レナードは振り返った。やがて扉が開いて、エルバートが音もなく入ってきた。

「おや殿下、もう起床されていたのですか。おはようございます。なぜすぐにお呼びにならなかったのです？」

「特に理由はない。それより、今日の議題は何だ？」

「はい。王都の街路、周辺都市の街道の整備に、貧民街の犯罪についてです」

エルバートはよどみなく答え、足もとのモノを避けつつレナードの側までやってくる。彼の腕には、今日レナードが着る衣服があった。寝台周辺はさすがに邪魔なので、モノは少なめだ。それでも、全くないという訳ではないが。

その唯一ある細長い空間で、レナードはいつも通りに身支度を整えた。

続いて、簡単に食事をとる。給仕もエルバートの仕事であり、彼もここで一緒に食事をとるのだ。以前は朝から食堂へ行き、王や王妃、王子、王女、最も近い臣下たちなどと食事をとっていたそうだが、現王はそうした儀式めいた食事を好まないため、今ではそれ

その部屋でとることがふつうとなった。

レナードもまた、人であふれかえった部屋で食事をとるのは大嫌いだ。ゆえに、王の代わりに政務をこなすようになってからは、儀式としておこなわれる特別な夜の正餐以外、こうして自室で静かにとることに決めていた。

すべての支度が済むと、エルバートをともなつて部屋を出、小会議室へ向かう。

途中、たくさんの臣下や宮殿に住みこんでいる貴族たち、待官、侍女とすれ違った。彼らはすぐに道を開け、畏敬の目でレナードを見てあいさつをする。いちいち応えていては大変なので、会釈だけですませる。それをくり返すうち、やがて会議室へ着いた。

しかし、まだ誰も来ていない。レナードはそれを見て怒るでもなく、早々に中へ入ると、自分の席——つまり国王の座る場所へ向かい、腰を下ろすと言った。

「エルバート、今日の分の書類をよこせ。片づけてしまおう。午後は舞踏会や催し物の打ち合わせで忙しいが、父上と母上に会いにいつて意見をうかがわなければ何も出来ないからな、余計な仕事はさつさと済ませてしまいたい」

「ああ、昨年は大変でしたしね。今回は円滑に決まると良いのですが……ああ、そうそう、ご報告が遅れましたが、私の招待という扱いで、シュディラント侯爵家にも招待状を出しておきましたよ」

早速書類に目を通しだしたレナードは、ほがらかに吐かれたエルバートの言葉に、手にした羽根ペンをうっかり折るところだった。

脳裏に大量の罵詈雑言が乱舞する。

だが、何とかそれらを追い払うと、まだ剣呑さの残る声で言った。

「ふん、そんなにあの掃除娘が気に入ったのか？　なら、お前が恋人にすればいいだろう」

「私には心に決めた婚約者がおりますよ。それに、私は確信しております」

「何をだ……？」

「当日になればわかることですが、殿下は私に感謝したくなると思いますよ」

エルバートは意味深な笑みを浮かべて言った。レナードは眉をひそめて「気色悪いな」とつぶやいて、書類に意識を戻した。

どれもこれも、単純な決裁書類ばかりだ。大半は、レナードがサインするだけで終わるような、すでに答えの出ているものが多い。時々、考慮を要求されるものもあるが、大半は単純作業だ。

そのせいか、思考が別のところへさまよいはじめる。

最初に頭に浮かんだのは、舞踏会についてだ。貴族たちが領地へ戻る秋から、移動の大変な冬などをのぞき、宮殿では頻繁に大きな催しものが開かれる。

臣下を慰労するような意味合いで催されることが多いが、それら

の行事に、レナードが顔を出すことはほとんどない。なぜなら、嫌いなのだ。そうした催し物が。

だが、今回の夜会は違う。王都に貴族らが戻りはじめ、社交のはじまる季節の先がけとして開かれるのだ。貴族たちの王家に対する挨拶もかねているため、顔を出さない訳にはいかない。

当日は宮殿が人であふれかえり、少し歩いただけで窒息しそうな気分になる。それが嫌でたまらない。

レナードは憂鬱だった。

「全く、催しなんて全部無くなってしまえばいいんだ。ただの金のむだ遣いだろっが」

苛立たしげにつぶやきながら、書類仕事をこなす。近頃は苛立つてばかりいる。

やがて、臣下たちが続々とやってきて席につきはじめた。全員の顔がそろったところで、ようやく朝議が始まり、レナードは不快な考えから解放されたのだった。

王家の一日 2

朝議は時間通りに終わった。

レナードはまだ王太子ではあるが、すっかり隠居を決め込んでいる王より、全権を委譲されている身なので、議会から提出された案件に対する全ての決定権を有している。

だが、ただ決定を下すだけの役割に甘んじるつもりのないレナードは、たびたび自分の意見を口にする。すると、老臣たちは顔をしかめてこうたしなめてくる。

——全ての案件に関しては、議会側が意見を出し合って方針などを決め、王はそれらを行ってよいかどうかの決定を下すことが仕事なのであり、それは議員たちの仕事なのだ。王が些末なことまで考えていては全体を見失いかねないので、王は王としての役割を果たして欲しい……と。

それは父である国王の運営方針であり、レナードの方針ではない。

また、王や王太子、王子らが会議に参加し、意見を述べた場合、その意見を蹴って不興を買いたくないという保身の気持ちも働くだろう。そうなれば、公平な会議を維持できない、などという屁理屈をこねたりもしてくる。

レナードは不愉快な気持ちをぶちまけるように言った。

「全く、あのためきじじいどもめ……あのうさんくさい笑顔は何だ。今度から会議で笑顔を浮かべたら罰金を徴収するという決まりでも

作ってやるうか」

「それについては全く同感ですね」

後ろを歩くエルバートが言う。

「とはいえ、まだ正式に王位を継承していない殿下では今は何も出来ませんよ。それより、国王陛下の居室をお訪ねするのでしょうか？ 夜会をどのように行つかはもうお決めになられていますか？」

「……それなりにな。だが、俺が考えるとつまらんそうだから、主となる催しについては母上とローレンシアに一任してある。母上は父上のところにおられるだろうしな」

「なるほど、その通りですね」

レナードはあっさりと頷いた部下に、そこは否定するべきだろうと思ったものの、口には出さなかった。エルバートの無礼には慣れている。

ちなみに、ローレンシアとはヴィオンテス王国の第一王女で、レナードの妹だ。

ふたりはほどなくして国王の居室に辿りついた。

扉は開け放されていた。レナードは特に声を掛けるでもなくさっ

さと入っていく。すぐに、テーブルでのんびりとお茶を飲んでいる国王夫妻がこちらを見た。

「あらレナード、あなたの方からこちらに来るなんて珍しいですね」

すぐに王妃、ヴァネッサがほらかな笑顔を浮かべて息子を迎え入れる。彼女は隣国から嫁いできた王女であり、母国では月の女神のようと言われるほどの美貌を誇っていた。年老いて衰えたとはいえ、まだまだその美しさは健在だ。

その美貌はレナードにも受け継がれており、並ぶとふたりが親子なのは一目瞭然だった。

流れる黒い髪は後頭部で品よくまとめられ、美しい金細工の髪飾りをつけている。ドレスは上品な青で、体の線を優雅に浮かび上げらせるものだ。体を締め付けて理想の体型を目指すやり方はすでに流行遅れになっており、彼女のドレスも、自然な曲線を描くゆつたりとした形となっている。

「おお、よく来たな。さあ、座れ。ニック、レナードにも茶を」

控えていた年老いた待官に言うと、国王ジェイラスは笑う。

王妃よりも遥かに年上なはずの国王なのだが、こうして見るだにまだ衰えを感じさせないものがある。なぜこうして隠居状態を決め込んでいるのか、レナードにはさっぱり理解できない。

やや白いものが多いものの髪はまだ豊かで、他の貴族たちが愛用しているかつらの世話にはなっていないし、おそらく死ぬときまで

大丈夫そうだ。

また、狩りが趣味であるため、体力を落とさぬよう日々鍛錬をしているとかで、体格もかなりがっしりしている。金のモールが飾り付けられたどっしりとした上衣をまとった姿は、まさに国王そのものだ。

レナードは自分には何十年もしないと備わらないだろう威厳にあふれた父に言った。

「いえ、今日は夜会についての最終確認をしに来ただけですから」

その口調はどこまでも素っ気ない。

「まあ、そんな寂しいことを言わないでちょうだい。わたくしたちと少し話をしていきなさいな、夜会についてもゆつくりと話しましょう。さあ、ほら」

王妃ヴァネッサは立ち上がると、息子の側へ歩み寄り、腕をつかんで自分たちの席へとぐいぐいと引つ張る。さすがのレナードも、母親には逆らえず、渋々と椅子に腰かける。

その目の前にすかさず湯気をたてる茶が置かれた。

「では、今年の催しについてですが」

さつさと立ち去りたいレナードはいきなり切り出した。すると、ヴァネッサは眉間にしわを寄せて、レナードを睨んでくる。

「あなたねえ、そんなことより言うことはないのですか？ わたくしたちがあなたの顔を見たのは一週間ぶりなのですよ。そこまで仕事ばかりしなくても良いでしょう。何のために臣下がいるのですか」

「ふむ……そうだな。ヴァネッサの言うとおりだ。彼らには彼らのやり方と矜持がある。臣下に求められるのは仕事中毒の国王ではないぞ、レナード。」

上にいるものは彼らの支えになりながら、全力で仕事ができるよう計らうことだ。その上で、自分の求めるものだけは提示するのが、上に立つ者に求められることだぞ」

阿吽の呼吸で、まるで示し合わせでもしていたように言う国王夫妻。

レナードはしかめ面で、何度となく聞いてきたセリフに対し、決して王太子たる自分が口にしてはいけない罵詈雑言の数々が浮かんでくるのを抑え込む。

それらのよろしくない不適切な言葉は、かつてレナードが敵国からの侵略軍を迎え撃つために出撃した際、下士官たちのテントを訪ねたとき、彼らが使っているのを聞いたために知ることとなったのだが、気が付いたらあっさりなじみの言葉となり、苛立ったときにはつい口について出てしまう。

——くそっ、だから居住棟じゅうちに来るのは嫌だったんだ。

頭をかきむしりたくなる衝動を抑えて、レナードは無言を貫いた。こういうときには、口を開くとうるくなことがないのは経験上知っている。

すると背後から、明るく爽やかな少女の声がした。

「あら、珍しい方がいるわよセロン。良かったわ。お兄様、セロン

がね、夜会の出し物について聞いてもらいたいことがあるそうなの」

レナードは、ぎこちない動作で振り返った。長いこと油をさしていなかった蝶つがいが開くときのように、首がギギギ、ときしんだような気がする。楽しい笑い声は、レナードにはさながら地獄から響いてくる悪魔たちの哄笑のように聞こえた。

——今日は何なんだ。俺が何かしたと言うのか！

振り返って扉を見やると、久しぶりに見る弟と妹が、嬉しそうに笑っている顔が目に入る。その顔を見て、レナードはうんざりとしてため息をついた。

王家の一日 3

そんなレナードの気分など露知らず、突如として現れた弟妹は明るく楽しいな雰囲気、気軽に喋りかけてくる。

「本当だ、珍しいですね、こちらで兄上の顔を見るの。いつ来たのですか。でも良かった、訪ねていく手間が省けましたよ。何しろ近寄りがたいですからねえ、兄上の執務室は」

「お前のがらくた倉庫に比べればまだ、少なくとも仕事も出来れば眠ることもできるからな」

弟、第二王子のセロンに向け、レナードは冷たく言った。自分のまわりには今、雪嵐が吹き荒れていることだろう。そう思った。それほどに、レナードは究極にイラついていた。

改めて、自身の弟と妹を見やる。どちらも、外見はともかく性格はレナードと似ていない。

弟のセロンは二十歳で、どちらかというと父親似の顔立ちだ。体格はまだ青年らしく細身で、緩やかに波うつ、つややかな褐色の髪に、輝く空色の瞳をしている。優美で整った顔立ちながら、レナードとは真逆に優しげで、明るい印象の強い彼の趣味は旅行だった。その上、あちこち出かけた挙句、さまざまな芸術家を見つけては作品を買い込んでくる。すぐにその後援につきたがる。そんな彼の蒐集癖はそれは恐ろしいもので、専用の美術館をつくる羽目になってしまったくらいだった。

妹のローレンシアは十七歳。レナードと同じで母親に似ているが、

やはり雰囲気は全く違う。どことなく妖精のような毒と愛らしさが同居したような、謎めいたものが彼女にはあった。母親譲りの艶めく黒髪は、頭の横で束ねてから真珠の髪飾りをつけて肩に垂らしている。

大きな瞳は濃い目の青で、すみれ色にも見える。瞳に合わせたのか、薄い紫色の清楚なドレスをまとい、手には羽扇を持っていた。

彼女の趣味は絵を集めることと、自分でも描くことで、良く話相手の貴族令嬢たちとともに写生会を開いている。それを繰り返すうちに絵の量も半端ないことになり、宮殿の何室かが、彼女の集めた絵描いた絵、そして令嬢たちの絵で埋まっていた。

今までに何人、ただ飯食らいの邪魔な芸術家をこの宮殿から追い出し、こっそり絵を持ち出しては裕福な王族や貴族に売り払って部屋を開けようと腐心してきたことか。もちろん、がらくたやらくがき同然のものはごみとして処理した。そうしなければ、宮殿が埋まってしまうだけでなく、国庫への負担もすさまじいことになるからだ。

レナードは思い出したら疲れてきた。

「あら、そうでもないわよ。少なくとも、セロンの倉庫にあるものは一応みんな美術品ですもの。でも、お兄様のお部屋にあるもののは大半は、明らかにごみなのではありませんこと？」

「あはは、そうだね。僕の美術博物館は、君の絵画部屋みたいなものだからね。でも兄上の部屋は違うよ。あそこは人間の住む場所じゃない、そもそも、住む場所と物を保管したり飾ったりする場所は別であるべきだと思うよ、ねえ、ローレンシア」

「ええ、わたくしもそう思いますわ。セロンお兄様」

互いにそう言っ、弟と妹は楽しげな笑い声を上げた。ふたりの声が唱和し、レナードは眉間にものすごく深い縦じわを刻む。不機嫌があふれ出そうになり、レナードは目の前の茶に手を伸ばした。清涼な香りと、渋みのきいた味に、理性が戻ってくる。

出してくれた侍従に感謝しつつ、レナードは固い声で言った。

「ふん、がらくた倉庫とらくがき部屋の間違いだろう。そんなことより、要件があるのなら聞くから言え。お前たちがそう言うだろうと思ったから、催し関連については何も決めていない。お前たちが決めて、主催しろ」

鼻を鳴らして言っ、レナードは控えていたエルバートに視線を送り、持ってきた書類をテーブルにはさりとひろげた。それを見て、ヴァネッサ王妃が眉をひそめる。

「ここは執務のためのテーブルではなくてよ。レナード」

「テーブルはテーブルでしょう。どうでもいいですよそんなことは、それで、決めてあるのか？」

「ええ、もちろんよ。せつかく国中の貴族や各国の王侯たちが集まってくるのだもの、うんと豪華にしなくてはとセロンとふたりで考えましたの。あれを持っていらして」

ローレンシアが言っ、侍女が何やら紙の束を持ってきた。それをテーブルに置く。王妃はそれを見て、諦めたようにため息をついた。そこに描かれていたのは、ローレンシアの絵だった。うつくしい水彩で、さらさらと描かれたそれを見て、レナードは一言告げる。

「だめだな」

「あら、どうしてですか？ ちゃんとお読みになりました？ 見て下さい。この薔薇園と南国の木々で作りました異国風のお庭。そこで異国から取り寄せたあらゆる果物を使ったお菓子で夜のガーデンパーティを開きますの。それから、こちらには珍しい動物たちを集めて見せる見世物小屋。こちらには……」

「もういい。わかった……だが、無理なものは無理だ。実現可能な案を提案してくれないか」

レナードはまくし立てるように語り始めた妹の言葉を手を振ってさえぎると、今度は王妃の方へと視線を向けた。

「それで、母上はこれを了承なさったのですか？」

「ええ。今回の催しは異国風で行こうと決めましたのよ。陛下もいと仰ったわ、何よりも、珍しい動物たちがとても見てみたいと言っの。手続きも始めましたのよ。あと数日で届くと思いますわ」

ヴァネッサ王妃は、ジェイラス王と顔を合わせて、うなずきあった。レナードは、少し前に処理した謎の案件の正体がわかり、この世の終わりのごとき深いため息をつく。

それから口をゆっくり開き、まるで道理のわからないものに説くように言う。

「それは俺が白紙に戻しましたよ。何で動物を連れてくる必要があるのか分からなかったのね。宮殿に動物園など作る気はありませんし、それに、どれだけ移送に金がかかると思っているのですか。」

だいたい、開くのは夜会だと言うのに、なぜそんな催しが必要だ
とお考えになられたのか、俺には全く理解できません。

いいですか？ 俺はどこに誰を配置し、どのような順番でことを
進め、流す音楽は何にするか、どの踊りをどの順番で行うか、飾り
をどのようにするかを決めて欲しいと言ったのですが、どうやら聞
こえていなかったようですね。不必要なことばかりお考えになられ
て、必要なことは決まっていらない……ああ、俺を試しているとい
う訳じゃあないですよね？」

声の温度が氷点下になったことを自覚しつつ、レナードはゆっく
り、じつくりと訊ねた。

何だか部屋の温度も下がった気がする。初春なのに、真冬に逆戻
りしたような感じがした。

ローレンシアの目には怒りが浮かんでいる。王妃は申し訳なさそ
うにうつむいてしまったが、レナードには彼女らをおもんぱかるだ
けの余裕がなかった。何しろ、夜会の開催日はすぐそこまで迫っ
ているのだ。こうなったら、自分で決めるしかないか、と思つて嘆息
すると、王がたしなめるように言った。

「そのような言い方はないだろうレナード。それに、この夜会は国
の威信を示す機会なのだ。これほどのことが出来る国なのだと、国
内だけでなく他国の賓客に示す絶好の機会なのだぞ？ 惜しんでは
ならぬものと惜しむべきものがお前にはわからぬのか？」

「そうでしょうか？ まあ、現状が見えていないのであるならば、
俺が企画して進めるしかなさそうですね。一応、企画自体は参考に
させていただきますよ。異国風、という案自体はとても素晴らしいです
よ。ただ、余計な飾りや催しは必要ないですけどね。それでは、忙

しいので失礼します」

「待ちなさい！」

立ち去りかけたレナードに、ヴァネッサ王妃が声を掛けた。レナードは胡乱な顔で振り返る。それまで少し悲しげにうつむいていたが、すでに表情が一変している。なんとしてでも行かせない、と言いたげな母の様子に、レナードは立ち止まると、彼女がつづきの言葉を言うのを待つ。

「企画に関してはあなたの言う通りなのでしょう。ですから、その方向で構わないわ。でも、行ってしまうばまたしばらく来ないのでしょう？ その前に教えてちょうだい。あなた、シユディラント侯爵のご令嬢とは上手くいきそうなの？」

レナードは予想外の方向から飛んできた問いに、思わずその場に倒れたくなった。

王家の一日 4

「なぜ、そのようなことを？ クレアラベル嬢とは、まだ二回しかお会いしていませんが」

「えっ！ お兄様と二回もお会いすることの出来たご令嬢がついに現れたの？」

ローレンシアが驚愕に満ちた声で問う。ローレンシアだけではない、セロンも、ヴァネッサ王妃も、国王ジェイラスすら一様に驚いた顔をしている。まるで、奇跡が起こったと言わんばかりの彼らの様子に、レナードは額に青筋が浮かぶのを感じた。

——二回会えたからどうだと言っただ。俺は猛獣か何かか……。

などと思っていると、感極まったような王妃の、叫びにも似た声が上がった。

「凄いわ、もう一生あなたの隣に立てる女傑なんか現れないとばかり思っていたのに。ああ、わたくしは嬉しいわ、会わせてくださらない？ 早く見たいわ、どんなお方？」

レナードは歓喜に満ちた王妃の顔を見て、何も言えなくなってしまった。苛立ちと羞恥など、さまざまな思いがないまぜになったような感覚に、口を開くのですら億劫になってしまったのである。すると、エルバートがいらぬ助け船を出してきた。

「殿下はあまり語りたくないようですので、無礼にならないようでしたら代わりに私がご説明させて頂きますが。どういたしますか？」

レナードはやめろ、と言いたかったが、それよりも早く母とローレンシアが食いついた。

「ええ、是非お聞かせ下さらない。どんなご令嬢なの？」

「はい、それでは僭越ながら。それはもう、素晴らしい方でございます。外見はやや幼く見えますが、美しい黒髪に黒い瞳の愛らしい方で、いつも笑みをたやさず、強さと清楚さを備えておられます。

実は、昨日も殿下をお訪ねになりました。あの部屋を見ても逃げるところか、殿下のご健康を心配して下さって……私は嬉しくて」

「まあまあ、泣かないでエルバート。あなたの苦労は知っておりますとも、レナードの気性に心折られてやめていく者が続出するなかで、あなただけは残ってくれたこと、わたくしは本当に嬉しく思っているんですよ。ねえ、せっかく希望の光が見えてきたんですもの、泣くより笑いましうよ」

王妃は励ますように言った。

その目から、全く汚れのない慈愛と同情があふれ、こぼれだしてきているような錯覚を覚える。それも、王妃だけではない。王も、セロンも、ローレンシアもまでもが妙にきらきらした表情でエルバートを見ているのである。レナードはその不気味さに、頭が痛くなってきた。

「ええ、そうですね。仰るとおり、希望が見えてきたのですから笑わなければなりませんね。ああ、そうですね、実は私、殿下の御為になるかと思い、クレアラベル嬢を夜会にお招き致しましたので、わざわざ呼び出さずとも、そこでお会いになれましょう」

「あら、やだ！　楽しみじゃない。良かったわ、お兄様に計画を否定されて、楽しみが消えてしまったかと思ったけれど、そうじゃなくなっただわ」

ローレンシアが嬉しそうに言う。セロンはその隣りで何度もうなずいている。王はそんな三人を微笑ましく見つめている。レナードは、全員の顔に何か投げつけたくなった。

「本当ね！　レナード、夜会を楽しみにしていますよ。ではエルバート、後はよろしく頼みます。放っておくと自分のことには全然かまわないのですから」

「はい。承りました……お心に添えるよう、全力でお世話させていただきます」

エルバートは丁寧に頭を下げると、テーブルの上に散らばった書類をかき集めた。早々に部屋を出て行きたいレナードは、ため息をつくと、苛立ったまま素っ気なく告げる。

「それでは、失礼します」

軽く会釈だけして、さっさと部屋の外に出る。すぐ後ろを、書類を抱えたエルバートがついてくる。色々と言ってやりたいことだらけだが、そんなことをしても疲れるだけだ。余計なことは考えず、やるべきことを優先するのが一番いい。レナードは要件を頭の中でまとめると、言った。

「エルバート、その書類を持って、内務大臣のところへ行つて来い。俺でなければ決定出来ないこと以外は、お前たちでまとめろ。近衛

騎士隊や、警備隊の隊長とも話し合って来い。侍女頭や侍従長、庭師たち、出入りの商人とも打ち合わせをしなくてはならないが、人手が足りなければ近衛騎士を使うと良いだろう。どうせ鍛錬か雑談しかしていない奴らだからな」

事前に決めてあることをのぞくと、決まっていないのは、王妃らに任せた飾り付けや、楽隊、演奏する音楽とダンスの順番などだ。正直、夜会などが嫌いなレナードは、そんなもの適当でいいだろうと思っているが、そういう訳にもいかない。つくづく、王族は面倒だと思う。

「殿下はどうなさるのですか？」

「いつもの鍛錬に行く……最近は天候が悪くて出来なかったからな体がなまっている。それに、さっきのお前の発言でたまった憂さも晴らしたい。全く、どいつもこいつも、そんなに早々に結婚して欲しいのか」

「それはそうでしょう。後継ぎが生まれなければ余計な争いを生みかねませんし、万が一殿下の身に何かあった場合であっても、セロン殿下に国王が務まるとは思えません。鉄砲玉のように異国へと旅立っていく姿を見ていれば、臣下でなくとも不安になります。また、他国にいらぬ思惑を抱かせてしまう可能性があります。王太子妃の座に王女を送り込み、内政に干渉しようと企む国は多いのです。このままでは、いらぬ隙を作り続けることにもなります」

エルバートの述べた正論に、レナードは嘆息した。彼の言うとおりだ。必要なのは理解している。だが、一生をとにすることになる人間を、そういう打算的な気持ちで選べば後でひどく後悔するよな気がした。

「まあ、何にしても、クレアラベル嬢が殿下を恐れない方なのは僥倖でした。これで、殿下も女性への対応について学べますし、彼女がだめでも、前例があれば色々と違うものですからね」

「……彼女を踏み台にしろと言っているように聞こえるが？」

「いえ、決してそんなことは。私はどちらでも構わないのです。ただ、彼女の存在は殿下にとってとても有用だと申し上げているだけです」

レナードは笑顔でさらりと告げた部下の顔を見て、口端を上げた。

なぜ、他の者たちはやめさせたのに、エルバートだけは残したのか。彼は事実だけを述べるからだ。腹の中がどうなっているかはともかく、決してうわべだけの言葉は口にしない。口でだけ調子の良いことを言って取り入ろうとする輩が多い中、そういう人材は貴重だ。また、エルバート自身が、飛びぬけて優秀であることも手伝った。

「と言いましたが、私は個人的にあのご令嬢のことは結構気に入っておりますよ。見た目もなかなか可愛らしいですし、馬鹿なことも言いませんし。……まあ、変わったことにご興味がおありらしいですが、華美なものもありお気に召さないようで、殿下とはきっと気が合われると思いますよ」

笑顔でそう締めくくった部下の顔を見て、レナードは腹立たしげに鼻を鳴らした。

「ふん……もういい。わかったからさっさと行け」

「それでは、失礼いたします」

エルバートは実に楽しそうにほほ笑みながら頭を下げると、レナードとは別の方向へと歩み去った。

「全く、たった二回会っただけだぞ？」

鍛錬場へと歩を進めながら、レナードは苛立ちまじりにぼやいた。出会いからして最悪だったのだ。気が合う、とエルバートは言ったが、到底信じられるものではない。だが、不思議と、また来ると言われても不快にならなかった。怪我をさせてしまったという罪悪感もあるだろうが、それでも、彼女の存在自体を疎ましいとは感じなかったのは事実だ。

と言っても、侍女姿で現れたときには、頭がおかしいのかと思っ
たし、物に触れられた時はすさまじく腹が立った。だが、心のどこかで彼女の言うことは正しいとわかっていた。

また、彼女は貴族令嬢にありがちな、意味深な目で見ることもしない。遠まわしに物を言ったりしない。真っ向から目を見てきた女は、今のところ彼女だけだ。その部分に関しては、好ましいと感じていた。

「とりあえず、虫よけにはなるか」

少なくとも、彼女と会っていれば、他国からの縁談も減るだろう。ただ、エルバートの言った通り、彼女を側に置くことによって、他のご令嬢の恐怖が軟化してしまい、寄って来られたらうつうつしいだろうが。まあ、そのときも、彼女を盾にすればいいだけの話だと

レナードは思った。

最大の問題は、部屋の掃除についてだ。その際には監視下において、余計なことをしない、つまり物を捨てさせないようにしなければならぬ。面倒だが、いずれは何とかしなければと考えていたことは確かだった。

——このままではモノも俺も埋もれて嫌われて朽ちていくだけ、か。

ふいに、彼女の声が脳裏をよぎる。その言葉とともに、今もなお自分に注がれる恐怖と嫌悪の視線を思い出す。レナードは自嘲した。その根本となる問題と向き合うことを恐れるあまり、ずっと先送りにしてきたのは事実だ。そこへ、あの娘がやってきて引つかきまわしていったのだ。ならば、今が向き合う時期なのだろう。

思案にふけりながら、レナードは歩き続けた。

宮殿に併設された兵舎は、正門から入って左手側にある。今までいた居住棟は南西に位置するため、歩いてすぐだ。途中で西の庭に出て、舗装された小道を進むと、兵舎へつく。途中、すれ違った兵士たちに敬礼をされながら、レナードは思考を切り替えて、兵舎の中にある更衣室へ向かった。

動きやすい衣服に着がえ、剣を手にとると、余計な感情が消え去って行くのを感じる。それからしばらくの間、レナードは時折姿を見せる士官を捕まえて相手をさせたり、銃の練習をしたりして過ごしたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5940q/>

魔窟で愛を語りましょう

2011年10月5日00時41分発行